

---

# メロン三丁目、めぞんディコメ

水沢 莉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

メロン三丁目、めぞんテイコメ

### 【Zコード】

Z6815C

### 【作者名】

水沢 莉

### 【あらすじ】

連載一時中断中・インチキ商品に意外な効果大発見！コンシェルジューとの接觸で次第に明らかになってくるめぞんテイコメ？の様子。メロン三丁目？での生活がいよいよ始まります。町、アパートで繰り広げられるコメディ小説。

## 序（前書き）

連載一時中断中です。すみません。

あとがきを稀に更新しています。

近況報告は少しありで、確認をお願いします。▽

・

「一つの町がある。

某県の隅っこに位置する田舎町。  
吹けば飛ぶような小さな集落だ。

俺がこの町に越してきたて、もうじき二ヶ月になる。

健康器具を扱う怪しげな会社の営業マンを勤める俺は、転勤という形でこの町にやってきたはずだった。

はつきり言つと、この会社の健康器具の効果は営業マンである俺にすら分からぬ。もつとはつきり言つてしまえば、インチキ商品を売つてゐるので効果なんて無い。

しかし、どうして商品を買つ気になつたのかこちらが聞きたいお年寄りなんかは、「お宅の商品は最高だ」と偶に電話をかけてまで褒めてくれる。

なので一概に効果が無いとは言い切れないのが不思議だ。

まあ、そんなお客様は稀の稀もいとこで、営業というよりも押し売りに近いセールスで一件一件を歩きまわつて何とか経営を成り立てている俺の会社は、一度も顔見たことのない社長をトップに、営業部長、俺、同僚：順に「齊藤部長」「近藤弘道」「加藤剛志」の「再婚か！」（斎・近・加）のトリプル藤<sup>ふじ</sup>の三人と、パートのおばちゃん数名で首都圏の片隅に事務所を設けて運営されている。

ちなみに商品はすべてパートのおばちゃんらの手作りといつも手作にて完成されている。

同じ商品にもかかわらず、その一つ一つの大きさ・形状が微妙にずれているのはそのせいだ。

「あたしだつたら絶対に買わないね」と日々にもらし、煎餅片手に昼ドラを見ながら作り上がつたおばちゃん達の工作品。

脳みそを鍛える商品の売れ行きが伸びてゐる今の現状を取り入れようとした一度も顔を見たことのない社長の、無謀というより思いつ

きの企画だつた。

それがいつの間にか商品化され、煎餅の欠片が散らばるおばちゃん達の作業テーブルの上に積み重なつていた。

今期の主力商品にしようと社長が口論んでいるその健康器具は、プラスチック製の帽子のてっぺんにアルミ製の5センチ程度の触覚が差し込まれた見るも無様なかぶり物だつた。

「至るところから発せられている電磁波の有効利用。触覚を通してクリーンな電磁波に変え、脳に刺激を与えます」という意味の分からぬキヤッチコピーがつけられた『脳を鍛える摩訶不思議なヘルメット』。ネーミングも微妙だつた。

おもちゃ以下のその健康器具のセールスが三ヶ月前から開始される事になつた。

それを「売つて売つて売りまくれ」という上からの命令でこの町へ転勤になつたのだつた。

引っ越してきてから気づいたのだが、肝心の転勤先である建物はどこにも見当たらなかつた。

この町に着いた初日、大量のヘルメットを抱えながら一戸掛けかりで事務所を探してまわつたが、それらしきビルも小屋すらも見あたらなかつた。

「あのお、転勤先の事務所がどこにもないんですけど

携帯の繋がらない田舎町で、ガラス戸に虫の死骸がへばり付く電話ボックスをやつと見つけた俺は、真夏の太陽の下で汗だくになりながら斎藤部長に電話を入れた。

「事務所があるなんて、いつ、誰が、どこで、誰に言つた?」

緑の受話器の向こうで、低く太いが、権力不足丸出しの斎藤部長の声が答えた。

「一ヶ月前、部長が、キヤメロンデヤンスで、俺に言いましたよね」噴出す汗をタオルで拭いながら電話ボックスのガラスに寄りかかつた。

ちなみに、「キャメロンデヤンス」とは、部長行きつけの外国人パブだ。

社長命令という転勤の話をそのパブで聞かされた。

調度、部長が金髪女のむちむちの太ももを「大根みたいに綺麗な色だねえ」と見当違いな褒めセリフを吐いていた時だった。

「転勤とは言ってないぞ。いや、言ったかもしないが、その町で営業して来いという意味で言つただけだ」

「でも一年間つて言いましたよね」

「一年間と言つたが、転勤とは言つてないぞ。いや、言つたかもしないが、そもそもうちの会社に支社なんてもんは無い」

耳を疑つた。すべてにおいて俺の勤める会社はインチキだった。

「こんなに遠くまで行かせて、アパートまで借りさせて、勤務先の事務所もないまま、営業し続けると?」

「ま、アパートを事務所だと思え」

「一年つて、えらい長い営業ですけど」

「100個売れたら、すぐにでも帰つていいぞ。じゃ、しつかり仕事してくれ」

それだけ言い残されると、「ぶ」という屁に似た音と共に電話は切れた。

「もしもししー?もしもししー部長!ー?」なんて切れた電話に必死に呼びかけるアホな役者のような事はしなかつた。

電話ボックスのガラス戸の向こうに広がる田んぼを見つめて受話器を戻した。

100個だ?「冗談のつもりか。このおもちゃ以下の不細工なヘルメットが100個さばけると本気で思つているのか。

その前に深刻な問題があった。散々歩き回つたが、どう見ても100個売れるような町では無いのだ。

なぜつて、100件の家が無いのだ。

といふか、なぜこの町に行けと命令が出たのかを知りたかった。

もう一度受話器を手にした。だが足元に置いた大量のヘルメットが

入ったダンボールを見ながらため息が漏れた時、すでに、もうビックリでもなれという気持ちに変わっていた。

目の前に広がる田んぼの中央に立てられた妙にリアルなカカシが黙つて俺を見ていた。

その藁のはみ出した頭の上に乗っかつたカラスが、時折黒すぎる翼を持ち上げて「バカアーバカアー�」と俺の気持ちを代弁するかのように鳴いていた。

## 強ひ聞違つてはいませんでした

まだ太陽は青々と広がる空のひへんにある。

町を取り囲むようにぐるりと縁が走るその向こうには綿菓子のような入道雲が立ち上り、何となく雨の気配が伺えた。

一匹の蛾が電話ボックスのガラスに体当たりをし、そのままひらひらとヘルメットで埋め尽くされたダンボールへと落ちていった。ヘルメットに光る触覚が陽射しを浴びて、ギラギラと田を刺す。

いくつもの光る触角の隙間から先ほどの蛾が這い出してきて、黄色いヘルメットに粉を撒き散らしてから田んぼの向こうへ消えていった。

その後を田で追い視線のたどり着いた先の縁の上には怪しげな雲が広がり始めていた。

蛾がガラスにぶつかりヘルメットの海に溺れて這い上がつてくるまでの僅かな間で、先ほどまで広がっていた青い空はうつすらと灰がかかっている。

相変わらず立ち上る入道雲のずっと奥から「ロロロ」と嫌な音が響いていた。

これだけのヘルメットを抱えながら雨に降られたりしたら溜まつたもんじやない。

いくらインチキ商品とはいって、一応今期の主力商品であることは間違いない。

今でこそまるで役立たずのヘルメットだが、雨に濡れたりなぞしたらもつと役に立たなくなつてしまつ可能性が非常に高い。

なんたつてオバちゃんの「工作品だ。ボンド、いや糊でくつつけたであらう銀色の触覚が取れてしまつ。

電話ボックスを出て雲に覆われ始めた空を見上げてからダンボールを持ち上げた。

田の前に銀色の触覚。

ふうと一つため息を吹きかけたら、蛾の撒き散らした粉が汗まみれの顔面に飛びついた。

「なんだかなあ」

とりあえず借りたアパートへダンボールを非難させなくては。砂利と土の混じった道を歩き始めたその農道の向こうに赤サビで覆われた二階建てアパートの屋根が見える。

会社を出る直前に斎藤部長に渡された手書きの汚い地図に記された場所にあるアパートのようだ。見て直ぐに分かつた。部長の手書き地図には一本の線と時折その横から伸びる短い線と「池」と書かれた丸、その斜め向かいに星模様が書かれてあり、矢印が向かれて「□□」と書いてあった。

「部長、なんですかこれ」

「なんですかって地図じゃないか」

広告の裏に鉛筆でうつすらと書かれた地図を手にしながら、鉛筆削りを黙々と続ける斎藤部長の頭のハゲに息を漏らした。

「いや、それは見て分かりますけども。線と丸と星だけの場所ですか」

「違うぞ」

「いや、線と丸と星だけですか」

「道と池とアパートだけだ」

削る途中で何度も芯を折り、13センチほどあつた鉛筆が7センチまで身長を縮めた姿を誇らしげに眺める部長は次の鉛筆を手にしながら当たり前のよう答えた。

「だからそういうじゃなくて。こんな安易な地図でアパートを見つけられるんですか」

「このとおりだから仕方無いだろ。無いものを書く」とは出来ない

今向こうに見える赤サビ屋根の向かいにはどぶのよつた池が横たわっている。

こんな地図で場所なんて分かるかと思つていたのだが、単純な地図  
どおりにそこにある光景に頭の奥で笑うより仕方なかつた。

広告の端の方には「メロン三丁目、めぞんティコメ」と書いてある。  
俺の営業先である町名と住まいとなるアパートの名前だということには始め気づかなかつた。

気づけるわけないだろう。「キヤメロン、デヤンス」同様、また部長の訳の分からぬ行き着けパブの名前か何かだと思っていた。

「部長、メロン三丁目、めぞんティコメつてまたすこい店見つけましたね」

「店?」

「これ、コメティアン上がりのオカマか何かが開いたパブなんでしょう? 俺は行きませんからね、キヤメロンでもう十分ですから」

「何を言つてゐる

「もう少しまともな店に連れてつてくださいよ。しかも店の名前入りメモ用紙同然の広告の裏になんて営業先の地図を書かないでもらえますか」

「そんな店、聞いたこともない

「は? じゃなんですかこれ、メロン三丁目、めぞんティコメつて

「お前の行き先に決まつてるだろう」

部長の手に握られていた新品の鉛筆はすでに4回ほどポキリと音を立てていた。

「行き先?」

「そうだ」

「メロン三丁目?」

「そうだ」

「めぞんティコメ?」

「そりだけ?」

「からかってるんですか」

「よし」

ようやく尖つた鉛筆の芯を満足げに眺める部長の手の中にほりせん

チほどの身長になってしまったHBが切なそうに顔をのぞかせていた。

「部長、聞いてます?」

「聞いている。だから返事してんだろ?」

「俺の営業先って、これがですか」

「そうだ」

「一体何なんですか、このふざけた名前は」

「違つてたかな」

「はい?」

「そんな感じの名前だつた気がするんだが」

「そんな感じって」

「社長からの又聞きだつたからな」

「社長は一体何処にいるんです? 一回も顔見たことないんですけど」

「まあ、その県に行つて、その電車に乗つて、そのバスに乗つて2つ田で降りれば町名もアパート名もはつきりするだろう」  
社長の話はあつさりとスルーされ、行くだけ行けば何とかなる的返事を返されただけだつた。

「アバウト過ぎやしないですか」

「そんなニユアンスの名前だつたから大丈夫だ」

今俺の手の中にはその地図がある。

齊藤部長の言つように、この県に来て、あの電車に乗つて、あのバスに乗つて2つ田で降りた場所がこの町だつたわけだ。

降りる直前でバス内に響いた運転手の声は「 三丁目へ  
三丁目へ」と聞き取れなかつた。

ダンボールを抱えながら降りたバス停に書かれていた町名を見て齊

藤部長の間抜けなヒアリング結果に何となく納得した。

『明金三丁目』

金どころか緑の田んぼが青々と広がる風景の町名とは信じがたいも

のだつたが、『メロン三丁目』ではない事にいくらか安心し、だが  
幾分かがつかりしたのも事実だ。

メロン三丁目ならそれはそれで面白かったのだが。

コケの匂いが鼻先にまとわりつく池の脇を過ぎ、赤サビ屋根のアパート前にたどり着いた。

一階に三棟、二階に三棟の木造アパート。

古い外観にベランダの柵の水色だけが鮮やかだつた。  
おそらくペンキ塗りたてだろう、木造の壁には所々水色のペンキが  
垂れた跡が不様に線を引いていた。暑さも手伝つてアパートが流  
す汗のようにも見えた。

少しの不安と胸に燻る期待を持つてアパートの数メートル先に建て  
られている看板に視線を移した。

『メゾン・デ・孝明』  
〔こうめい〕

「・・・・・」

どう反応すれば良かつたか。

斎藤部長のヒアリングは強ち間違つてはいなかつた。メゾンデまでは完璧だ。

ディコメと解釈した部長も部長だが、この名前をつけた管理人も管理人だ。

自身の名前か。しかし何故この結果だ。

せつかく意氣込んでフランス風にメゾン・デまで付けて、結局最後  
に「孝明」なのか。

何のリアクションも示せず、ただ己の無言の傍でカエルの声だけが  
陽気に笑つていた。

完璧に広がつた黒い雲の奥に稻光が垣間見え、目の前に抱えたヘル  
メットの黄色にとうとうポツリと兩粒が落ちてきた。



「やべ

俺は先ほどまで呆けて眺めていた『メゾン・デ・孝明』の看板の横を慌てて走り過ぎ、アパートの裏手へ回った。

各々の部屋の前には黒く塗られた玄関扉が並んでいる。

同じように赤い錆びたポストがその隣に設けられている。壁にぴたりと身体を押し付け、ふうと息を吐いたその瞬間、天が何かを思い出したかのようにバケツをひっくり返したかのような雨が落ちてきた。

「危ない危ない

間一髪だった。ヘルメットには数滴の雨粒が光るもの、てっぺんの触覚は全て無事だった。

「で、俺の部屋はどこだ？」

斎藤部長からは『めぞんティコメ』というネーミングしか情報は入っていなかった。

アパートの手配は部長が進めてくれていた。

部長が手配するという事にもっと慎重になつておるべきだった。

「とりあえず俺から管理人に連絡しておいたから心配ない。鍵は行つたその時にもらつてくれ

「その日にですか

「その日にだ」

「何号室とかは…」

「分からん

「引越し荷物とかもあるんですけど」

「ヘルメットだけもつていけば何もいらんだろう」

「ヘルメットで生活ができますか。俺も一応人間ですし、家電も欲しければ家具だって必要最低限のものは欲しいですよ

「じゃ、あとから送ればいい」

「俺が引っ越してしまったら、一体誰が荷物を送つてくれるんですか」

「加藤にでも頼んでおけ」

こんな調子だつたものだから、俺は本当に手荷物一つとヘルメットのダンボールしか引越し初日は持ち込んでいなかつたのだ。

仕方なく俺は部長に言われた通りに後輩の加藤に荷物の発送を頼むことにした。

「任せください。とりあえずアパートに着いたら連絡ください」「悪いな。こんなはずじゃなかつたんだけど。部長が相変わらずで

「まあ、斎藤部長の手配ですからね、当てにしたままでいいですよ」

「アパートの名前もあやふや、何号室かさえも分からぬ。参つたな」

「仕方ないっすよ。ちゃんとした住所分かつたら教えてくださいね。直ぐに米送りますから」

「…米つて

俺は加藤を当てにしてもよいのだろうか。

二コ二コと微笑む加藤の顔面に斎藤部長の影が被つた。

「いや、米とかは現地で調達できるし、その前に必要なものつてあるだろう」「うう」

「水ですか」

「…そうだな。とにかく着いたら連絡する。そのときに必要なものを全て言つから、ちやんとメモを取りながら聞いてくれ、加藤」「任せくださいっすよ」

頼もしい後輩の言葉を胸にその夜俺はいそいそと荷物をまとめたのだった。

ますます雨足が強くなってきた。

アパートの裏には切り立つた崖が数十メートル上まで伸びてゐる。

その上にはやはり緑がびっしりと生い茂り、背景に広がる黒い雲の中で稻光が燻っていた。

「ゴロゴロ」という音はさっきよりも近づいている。

崖を伝つて降りてくる雨水が玄関前の土に這いつくばり薄い湖ができかかっている。

先ほどまでの暑さに焼けた土は、雨水を含んで＝＝＝＝ズの匂いを放つていた。

壁に寄りかかつたまま左隣にある黒い玄関扉、一階の左端の部屋の表札を見る。

『Concierge (コンシェルジュー・門番)』

「は？ コンシェルジュー？」

赤いマジックペンでへたくそに書かれたフランス語。もしかしたら管理人室か。

何なんだ、俺は一体どんなところへ来てしまったのだ。しばらくその赤い文字から目を離せなかつた。

激しい雨は足元にも時折びしやりと跳ね返る。

このままここに立つているわけにもいかない。

抱えたダンボールを下ろすこともままならず、左腕とアゴで箱を抱えながら赤いポストの横の呼び鈴をやや緊張しながら押した。

『ボンジュール！』

「……」

なんだこの呼び鈴の音は。

音じゃない。肉声じゃないか。しかも「ボンジュール」って。

このときから既にこのアパートの怪しさが伺えていたのだ。

俺が呆気にとられていると、中から男の声がした。

「はーい」

コンシェルジューは普通に日本語を発していた。日本人であることは間違いない。やや安心した。

「あの、コンシェルジュー…管理人さんですか？」

「コンシェルジューです」

「「ン… ここ の 管理 人 に あたる 方 です か?」

「そ う で す け ど」

「今 日 か ら お 世 話 に な る 近 藤 で す」

「あ あ、 は い は い、 齐 藤 さ ん か ら 聞 い て ま し た よ

「俺 の 部 屋、 何 号 室 で す か ね」

「あ あ、 ち ょ つ と 待 つ て く だ さ い、 今 開 け ま す か ら」

鍵 を 外 す 音 の 後 に 扉 が 開 き、 中 か ら 太 つ た 中 年 男 が 顔 を 覗 か せ た。 も は や 日 本 人 で あ る こ と は 明 ら か だ つ た が、 白 い タン ク ト ッ プ に ハ ーフ パ ン ツ と い う、 お に ぎ り が 非 常 に 良 く 似 合 う で あ る ろ う オ ヤ ジ が に つ こ り と 微 笑 ん で い た。

「「ン シ ェ ル ジ ュ」 の 言 葉 に しつ く り こ な 過 ぎ る そ の 容 姿 に た だ マ ジ マ ジ と 視 線 を ぶ つ け る 事 し か 出 来 な か つ た。」

「ボンジ ュール!」

「… は じ め ま し て。 お 世 話 に な り ま す」

「い や い や、 す ご い 荷 物 で す ん、 何 で す か そ れ?」

「会 社 の 商 品 で す」

「雨 の 中 大 変 だ つ た で し ょ う。 今 お 部 屋 に 案 内 し ま す か ら ね 「お 願 い し ま す」

「近 藤 さ ん の 部 屋 は 一 階 の 真 ん 中 に な り ま す か ら ね。 あ、 そ う そ う 私 は 内 藤 で す。 宜 し く お 願 い し ま す ん」

「内 藤… 孝 明 さ ん で す か?」

「いえ、 内 藤 康 夫 で す」

「… そ う で す か」

「「ン シ ェ ル ジ ュ」 は 俺 の 前 を 行 き、 一 階 へ 続 く 階 段 を 上 り 始 め た。 ゆ つ ゆ つ ゆ つ ゆ つ さ と ハ ーフ パ ン ツ の 中 の 尻 が 摆 れ て い る。」

「営 業 で す つ て ね」

「ええ」

「大 夘 で す ね」

「ええ」

「ま あ、 こ の 町 の 住 人 は 皆 い い 人 ば か り で す。 き つ と 売 れ ま す よ」

「そうですかね」

「分かりませんがね」

「一階の真ん中の黒い扉の前に着き、管理人…コンシェルジュは振り向いた。

「こちらです」

「どうも」

「今、鍵を開けますからね」

「はい」

扉に鍵を突っ込み力チャリと音を立てるコンシェルジュが前かがみになる。

その背中越しに見えた扉の表札に釘付けになつた。

『Les misérables』

「レ…」

「ミゼラブルです。レ・ミゼラブルが近藤さんのお部屋の名前です」「レ・ミゼラブル…たしか…ヴィクトル・ゴトーの」「このお部屋、ちょっと名前があれで、敬遠されがちでしてね。その分お安くなつてますから」

「ああ、無情…」

「まあ、そんな感じです。“哀れな人々”って訳するのが正しいんですけどね」

「…」

「知ってるフランス語を使つたらこうなつたつていうだけですから。気にしないでください。逆にカッコいいじゃないですか。素敵な響きですよ、レ・ミゼラブル」

ダンボールを抱える腕から力が抜けた。

寸でのところでヘルメットの落下は食い止めたが、田舎町へ営業へ行かされた哀れな身に、見事に哀れの称号を与えられた事で一階まで立ち上るミミズの匂いが絡み付いた。

泥土の上を這いつぶぱつているような感覚が全身を覆つた。

「じゃ、こちらが鍵です。落ち着いたら内線でもください。お茶を

用意しますか？

「…はい」

「これから宜しくお願ひしますね」

「…宜しくお願ひします」

内藤コンシールジューはにっこりと微笑み階段を降りていった。

階段を一步降りる度にゆつとゆつと揺れる腹の肉を眺め、まだゴウゴウと降る雨音を聞きながらその場に立ち尽くしていた。

崖を伝う雨は俺の涙か。

黒い扉に振り返ると、フランス語の赤文字が「ああ、無情」とだけ俺に囁いていた。

## 被つてみたら大発見

“哀れな人”の称号を『えられた俺は、まさに“ああ、無情”な気分で「レ・ミゼラブル室」に足を踏み入れた。

何故「レ・ミゼラブル室」なのか。

いや別に「レ・ミゼラブル」の意味に落ち込んでいるのではない。いやいや落ち込んでいるのは確かだが、「レ・ミゼラブル」に腹を立てているわけでもない。

何故フランス語なのかといふことでもない。

何故「A号室」や「1号室」といった普通の部屋名を付けられたのか。

そこだ。

一体誰が名づけたのか。

あの管理人か。内藤コンシェルジュか。

コンシェルジュ…今更だが何故コンシェルジュなのかといふことも気になり始めた。

どの面下げてコンシェルジュを名乗るか。

あの腹と尻はどう<sup>ひいきめ</sup>顎<sup>ひいきめ</sup>目で見てやつても裸の何とかだ。

玄関に入つてしまらく謎のコンシェルジュとレ・ミゼラブルについて頭を悩まされたが、裏山に落ちたのだろうか、ドドドーンという落雷の音に我に返つた。

「ま、どうでもいい」

そもそも斎藤部長が探した物件だ。こんな事が起こつても仕方がない。

むしろこうなつてしかるべきだ。「キヤメロンティヤンス」に通う部長だ。

明金三丁目を「メロン三丁目」、メゾン・デ・孝明を「めぞんティコメ」と何食わぬ顔で地図に書き添えた男のやることだ。

俺が斎藤部長に電話でもして「レ・ミゼラブル室でした」と報告す

れば、きっと「レミ イズ ワンダフル？ 楽しそうな部屋だな」と返してくるに違いない。  
ま、それもどうでもいい。

俺は靴を脱ぎ台所に踏み入つた。およそ三畳分のスペースに流しとガス台が備え付けられている。

そこにヘルメットの入ったダンボールを下ろし、雨のせいで余計に薄暗くなっている狭い部屋を見渡した。

フローリングではない。畳貼りの六畳部屋。向かって右手側の襖を開けるとやはり畳貼りだが三畳部屋が隣接していた。  
ふすま

意外にも部屋は小綺麗だった。

それもそうか。名前からして敬遠される部屋だ。殆ど使われていなかつたと見るのが正しいのだろう。

というよりも長いこと空き部屋だつたに違いない。

以前この部屋を使っていたかもしれない主の生活臭は微塵も残されていなかつた。

目の前のベランダ用のガラスには激しい雨が音を立てて吹き付けている。

灰色に曇つたそこには時折稻光が縦に反射した。  
立て付けが悪そうなガラス戸はガタガタと震えている。

振り返ると、後ろの壁に内線用の電話が掛けられていた。

「落ち着いたら内線でもください」と言つたコンシェルジの言葉にやや違和感を抱えながら返事を返していたが、これのことだったのか。

こんなちつぽけなアパートに果たして内線電話など必要なのだろうか。

どんな用事で使うのだ。

刹那そんなことを思つたが、その場はそれ以上深く考へることもなく次の思考に頭のスイッチは切り替わつていた。

当たり前だが部屋はがらんどうだ。内線用電話以外何もない。

その壁の向こうに目をやれば、湿気を含んだせいで形がゆがみ始めているヘルメット入りダンボールが台所の床に所在無げに佇んでいるだけだった。

「さて、これから今日一日をどう過ごすか

俺が引越しに持ち込んだ荷物はヘルメットと僅かばかりの金とカツブ麺だけだ。

幸いガスコンロは備え付けてあるものの、肝心のやかんも鍋もない状態だ。

夕食は乾燥麺そのまま丸かじりか。

それは避けたかった。

それじゃなくとも“ああ、無情”状態なのだ。

何もない部屋で麺とかやくをそのまま頬張る己の姿を想像し、背筋に悪寒が走った。

しばらくガラス越しから降りしきる豪雨を眺め、俺の手は無意識に携帯電話に伸びていた。

ポケットに手を突っ込み、慣れ親しんだその感触に触れた直後に思い出した。

この町に降り立った時から既に圏外だったと。

おそるおそる携帯を開く。確認するまでもなく普通に圏外だった。

「だよな

自分の顔に苦笑が浮かぶのが分かる。

しかし俺は諦められなかった。

六畳の部屋を歩き回り僅かな電波を探った。

分かりきっていたことだが結果は虚しいものだった。

圏外の文字は一本の線を表示することさえも許さずそこに陣取つたままだつた。

それでも諦めきれない俺は隣りの二畳部屋に移動し、やはり隅々まで歩き回った。

しかし結果は同じことだった。

「これじゃ加藤に連絡すら入れられん

途方に暮れた俺の目の隅に、再び窓から差し込んだ稻光に反射する銀色が飛び込んできた。

台所に置いたヘルメットの触覚だ。

黄色の上に乗つたやけにキラキラと光る触覚に俺の足は無意識にそのダンボールへ引き寄せられていた。

「これに水でも入れて火にかけてみるか

ため息混じりに漏れた馬鹿な発想がヘルメットの山に飲み込まれていぐ。

俺の声など受け止めているはずもないヘルメット達はただ無言のまま整然と箱の中で積み重なつていた。

「そういえばこのヘルメット、一回も被つたことないな

それもそうだ。こんな不細工な代物、誰が好き好んで被つたりするだろう。

一つを手にし、その間抜けな姿をマジマジと眺めた。

「電磁波の有効利用ねえ」

言いながらそいつを頭に乗せてみた。他にすることが無かつたのだ。トイレのドアを開け、そこにある鏡に自分の姿を映して笑いが漏れた。

少しばかり左寄りに傾いているが、それでもピンと立つた触覚が頭の上で白熱灯の光を浴びて輝いている。

スーツ姿の身に黄色の触覚付ヘルメット。

「アホな現場監督か」

しかし何故か力ポリと頭にフィットする感触が思いのほか心地よく感じられた。

意外な被り心地のよさに驚いた。

加えて全身をピリピリと何かが走る。

例えるならばそれは整体などで受ける電気治療のようなものだつた。その妙な心地よさから、俺は己の間抜けな姿を携帯カメラに収めておこうと思いついた。

頭から流れ込むピリピリとした感覚は携帯を開く指先にも伝わって

いる。

「ん？」

携帯を見る俺の目がある一箇所で固まった。

小さな画面の左上、そこにあるはずの圏外の文字が無くなっていたのだ。

「え？」

無くなっているところとはそつ、電波状況を示す棒が立っているのだ。

しかも2本。

「何だこれ」

驚いた俺は鏡に視線を移し、そこに移る自分の姿を再び凝視した。相変わらず間抜けな現場監督と化した「」が呆けた顔でこすりを伺っている。

気のせいかてつべんの触覚が自ら光を放つていても見えた。

「もしかしたら「トイツか」

訝りながらヘルメットに手をかけ頭から外した。

途端先ほどまで身体を巡っていたピリピリという感覚がピタリと無くなつた。

慌てて携帯を確認してみる。

そこには圏外の文字が再び表示されていた。

「マジで？」

急いでヘルメットを被り直し、もう一度携帯を覗き込んだ。

「立つてる…」

バリサンとまではいかないが、話をするには十分の一本線がきつちりと表示されていた。

「あり得ない…」

俺は狂つたように蒸し暑さも忘れて狭いトイレの中でヘルメットを被つたり外したりを繰り返した。

被る度に線が立ち、外すたびに圏外が表示される。

腕の上げ下げによる筋肉の痛みとじつとりと流れる汗に覆われた俺

の身体は少しばかり震えていた。

ヘルメットの被りすぎでボサボサに乱れた髪の俺は鏡の中で頬が赤かつた。

「これは、ひょっとするとひょっとするぞ」

『脳を鍛える摩訶不思議なヘルメット』、これは初めから嘘っぱちだ。脳など鍛えてくれるはずもない。まずはネーミングの見直しだ。『電磁波の有効利用』そこら辺は正しいのかどうか分からないうが、まるつきり的外れなキャッチコピーでもないだろう。しか少し手を加える必要はありそうだ。

どうしてなのか、何がそうさせるのか、説明はつかないが電波を引き寄せる効果があるのは確かだ。自分で立証済みだ。

興奮のせいなのか、はたまたピリピリという電気のようなもののせいなのか、ともかくにもプルプルと痙攣にも似た震えが走る指先をボタンに乗せて、俺は加藤の名前をスルーし、斎藤部長へ電話を入れたのだった。

## 蔽からステイックヒミツイズワンダフル

ヘルメットを被つた俺は六畳部屋の中央に移動した。手にする携帯は立派に一本線を表示している。耳にあてる受話部分からはプルル…と小気味良い発信音が響いていた。

八度目の一言で斎藤部長の低い声が出た。

「もしもし、何だ」

「何だつてことはないでしょ、近藤です」

「それは分かつている」

「部長、着きましたよ、明金三丁目、メゾン・デ・孝明」

「ああ着いたのか、良かつたな。直ぐに分かつたか、メロン三丁目、めぞんディコメ」

「メロンじゃなかつたですよ、明金です」

「め…ろん、三丁目だろ」

「め…い…こ…ん、三丁目です」

「ふーん」

「何ですかその反応。メロンと明金、だいぶ違うじゃないですか」「似たようなもんだる、無事着いたんならいいだろ、メロン三丁目」

「だから…明…、ま、無事着いて良かつたですよ」

外回りでもしているのだろうか、相変わらず無責任な部長の声の後ろでは、時折車のエンジン音が響いていた。

「で、どうだ、めぞんディコメは」

だからそれも違うつて。「メゾン・デ・孝明」だと正そうかと思い口を開きかけたが、繰り返し何度もしたと同じでこの斎藤部長の頭にはきちんとインプットされる事はないだろ?と思いつつ直し言葉を呑み込んだ。

「まあ、見た目はボロいけど、中はまあまあですよ、メゾン・

デ・孝明

「メゾン・デ・孝明?」

分かるのかいっ!!

明金三丁目を理解できない斎藤部長は、「メゾン・デ・孝明」の限りなく「めぞんディ「メ」に近い方の言葉の誤りを理解できた。

「良く分かりましたね、メゾン・デ・孝明」

「お前が今そう言つたんだろ?」

「…明金三丁目」

「マロン三丁目がどうした」

「…」

何故そこは理解できない。しかも既に町名が変わっている。

「いえ。何でもありません」

「で、何号室だつたんだ。加藤が気にしてたぞ」

「レ・ミゼラブル室です」

「レミ イズ ワンダフル? 楽しそうな部屋だな」

「…」

やつぱり。

俺の想像は間違つていなかつた。

「ああ、無情ですよ、レ・ミゼラブル」

「編む嬢、レミ イズ ワンダフル? 何屋なんだ、そのレミって  
いう女は」

「…それより部長、あれ被つてみました?」

「なんだ、あれって」

「ヘルメットですよ。摩訶不思議なヘルメット

「ああ」

「被つたんですか」

「被るわけないだろ?」

「…ですよね」

部長の声の奥ではエンジン音に加えて人ごみに溢れる足音が漏れてくる。

ただ豪雨の中、ポツンと一人狭いアパートに放り込まれた自分の現状を思い、ふいにその喧騒<sup>けんそう</sup>が懐かしく感じられた。

「賑やかですね、外回りですか」

「まあ、そんなところだ」

「「」」ちは酷い豪雨ですよ」

「さうみたいだな、さつきからお前の声と一緒にビタビタと何かが  
煩い<sup>つら</sup>と思つてたところだ」

「ヘルメット売れました?」

「売れるわけないだろ?」

「そんな自信たっぷりに言わないでもらえますか? そっちで売れないヘルメットがこんなど田舎で売れるとでも思つて俺を送りだしたんですか」

「さあな」

「さあなつて」

「で、なんだ、用件は」

おそれく一服でも始めたのだろ? 「よつこつよ」 と囁<sup>囁</sup>の声と共にふつと息を吐く音がする。

直ぐ耳元で聞こえる部長の吐息が何となく気持ち悪く、思わず受話部分を数十センチ離してから再び耳元に当て次の言葉を切り出した。

「あのヘルメット、すごいんですよ」

「なんだ、藪<sup>やぶ</sup>からステイックに」

「何故、ルー語なんですか」

「流行つてるだろ? ルー語」

「まあ、そうですけど」

「で、藪からステイックになんだ」

「俺、さつきヘルメット被つてみたんですよ」

「ほつ」

「そしたらですね、大発見をしたんですね」

「ほつ」

「今俺、携帯から部長に電話してるんですけどね」

「それは分かっている」

「ええ。でも携帯の繋がるような場所じゃないんですよ、明金二丁目」

「さうなのか、マロソニ二丁目」

「マ… そつなんです、明金二丁目」

「ほひ」

「でもですね、ヘルメットを被つたらですね、繋がったんですよ、携帯」

「意味が分からん」

「えーっとですね、明金二丁目に来たときには既に圈外だったんですね」

「うむ」

「もちろん、レ・ミゼラブル室に入つても圈外でした」

「レミ イズ ワンダフルも圈外だつたと」

「… そうです。でも思いつきで… というかたまたまヘルメットを被つてみたらですね、何故か電波が入つたんです。で、こうして斎藤部長に電話をかけることが出来てるんですね」

「ほう」

「驚きませんか？」

「なんでだ？」

「なんでだつて… 圈外だつたのが、ヘルメットのおかげで電波が入つたんですよ」

「ほう、それはす」 こ、最初からそう言え。回りくどくて分からん 鈍い。鈍すぎる。斎藤部長が部長に成り得たことが不思議に感じられた。

「このヘルメット、脳なんて鍛えませんよね」

「当たり前だろ」

「だから自信たっぷりに自社の製品を否定しないでもらえますか。それを売りに来ている俺のことも考えてくださいよ」

「俺の命令じやないからな」

「でしょうけどもね」

「で、なんだ」

鈍い。鈍すぎる。そこでもうと驚き、商品の売り出し法を考え直すべきだと何故思えない。

半ば呆れながら俺は斎藤部長に説明を開始した。

「このヘルメットですね、脳なんて鍛えませんから、そもそも商品のキャッチコピーを見直すべきなんです」

「うむ」

「そんなキャッチでこのベンテコな被り物を持ち込んで絶対売れませんからね」

「うむ」

「しかし何故か携帯の電波をキャッチする機能を備えているんですね」

「うむ」

「びっくりでしょ」

「そうだな」

「脳を鍛える摩訶不思議なヘルメット、これは名前も付けなおします」

「うむ」

「電磁波の有効利用が何とかかんとか…これも少し手を加える必要がありますね」

「うむ」

分かつてているのかいないのか、斎藤部長は電話の向こうで一いつでつかい欠伸をかましている。

「部長も試してみてくださいよ。ヘルメット被つて」

「しかしだな」

「なんですか」

「こつちは電波バリバリ入るからな、そんな検証、アイキャント、

できない」

「なんでルー語なんですか、分かりにくいでしょ」

「流行つてゐるだらう、ルー語」

言われてみればそうだった。

都会でこのヘルメットの機能を試してみることはなかなか難しい。そして田舎町で「」のヘルメットの効果が期待できるところなのだ。

「部長、加藤はどうしているんですか」

「」

「それも考え直すべきです、」のヘルメットは田舎で「」を役に立ちます

「話をリッスン、聞く限りではそうひじにな」

「社長はどうですか？」

「まあ」

「まあって。社長に言つてくださいよ、商品名とキャッチを一から考え方直すべきだと

「そうだな」

「ともすればこれは大発見、いや、大発明ですよ」

「そうだな」

一人興奮する俺を尻目に部長はやけに落ち着いている。いや、落ち着いているというよりも何も考えていらないに違いない。「」で「」語を使おうか、そんなことばかり頭に過ぎついているに違いない。

「必ず言つておこしてくださいよ。売り方によつては絶対ヒット商品になります」

「ああ」

「なんだつたら俺が立証済ですか、商品名とか色々考えますからとも言つておいてください」

「ああ、そうする」

「必ずですよ。」んな田舎に来た俺の苦労を無駄にしないでください

「い」

「」

「使うとこじやないですよ」

「気にいってるんだ」

「…じゃ、そういうことで。また連絡しますか?」

「分かった」

一抹の不安よりもかなりの不安を抱えながら俺は電話を切った。  
指先にはピリピリと電気が流れている。

ヘルメットを被る頭は蒸し暑さのせいでもワカワカと汗を搔いていた。  
こめかみ部分から一筋の汗が流れ落ちてきた。

「次は加藤だな」

引越し荷物を送つてもらわねばならない。

だが蒸れた頭が気になつて一度ヘルメットを外した。

何も無い部屋で俺の頭から昇る湯気だけが白く緩々（ゆるゆる）と  
踊つていた。

## 加藤、お前もか

頭から昇る湯気が收まりかけた頃、俺はもう一度力ポリとヘルメットを装着し加藤へ電話を入れた。

ベランダの窓に叩きつける雨の音はだいぶ弱まりかけていた。灰色だつたその色も一段階上の明るさを含んだ色に変わつてゐる。

「もしもし？ 先輩すつか？」

加藤の陽気に高い声が六度田のホールの後に響いた。

「ああ俺だ。さつき無事に着いたよ」

「良かつたつすね。で、ちゃんと在つたんですか、メロン三丁田」「在つた。正確にはメロン三丁田じやなかつたんだけどな。め・い・こ・ん三丁田だった」

「めいこん三丁田」

「そうだ」

斎藤部長よりも理解が早い加藤にやや安心した。

「で、めぞんディコメは在つたんですか？」

「在つた。正確にはめぞんディコメじやなかつたんだけどな。メゾン・デ・孝明だった」

「めぞんでこじうめい？」

「そうだ」

「どんな字書くんっすか」

「メゾン・デまではカタカナ、孝明は孝子の孝に、明るいって漢字だ」

「メゾン・デ・孝明」

「分かつたか？」

「それ、間違つてませんよね」

「ああ、間違つてないんだ」

「変な名前つすね」

「ああ。馬鹿にされた感じだよ」

齊藤部長よりはきちんと物事を判断できる加藤にますます安堵した。

「荷物送つて欲しいんだ。ホントに何も無くてな」

「任せてください。業者も手配済みですから」

「なかなか気が利くな」

「ええ。後は必要なものを言つてくれれば送り出すだけですから。先輩、メモ取つて聞けと俺に言つたでしょ」

「ああ」

「一応、米と水はダンボール三箱分用意してありますから」

「… そうか、ありがとう」

やはり米と水は準備済みだつたか。

見当違ひの気もするが、今の俺の状況からして加藤の用意してくれた米と水はそれなりに有りがたかつた。

「それより先輩、藪<sup>やぶ</sup>からステイックですけど、今どこから電話かけてます？ 携帯ですよね？」

「…」

瞬間、齊藤部長の間抜け面が頭に浮かんだ。

「お前もか」

「え？」

「いや、何でもない。部屋からだ」

「部屋？ 可笑しいなあ、電波入ります？ 俺何度も先輩の携帯に電話したんつすよ。てんで繋がらないんで、どこかで事故つてるのかと思いましたよ」

「事故つて」

「無事で良かつたですけど

「まあ、説明するどだな…」

俺は齊藤部長へ報告した通りのことを加藤へも説明した。

途中加藤は「へえ！」「マジっすか！」を連発し、俺の一言一言に感嘆の声を上げた。

齊藤部長の抑揚の無い声を聞いた後だった俺は、その大げさ過ぎる加藤の反応が嬉しかった。

「す」「いだろ」

「やばいっすよ」

「だろ」

「俺も田舎町に行つて営業かけた方がいいっすね」

「ああ、そのほうがいい。時期に社長…部長からかもしないが命令が下ると思うんだがな」

「そうですね、準備はしどきますよ」

「大変かもしないけどな、田舎町に飛ばされるのは

「いいんですよ。俺、田舎に泊らう好きですか?」

「泊つてわけじゃないんだぞ」

「ああそうか」

大丈夫だろ?か。やや心配したが加藤のこのノリならどうに飛ばされても直ぐやつていけるだろ?。

「じゃ、今言った家電やら何やら、ちゃんとメモ取ったな?」

「はい、ちゃんとメモ取りました。これから直ぐに業者に積み込まれます」

「宜しく頼むぞ」

「任せてくださいっすよ」

張り切る加藤の声にそういうと気がついた。  
ちゃんとした住所を教えていなかつたのだ。

「加藤、俺住所まだ言つてなかつたわ」

「あ。そうでしたね」

「県」

「県」

「××市、

「××市

「明金二丁目、

「めいこん二丁目…って、めいこんつて平仮名つか?」

「いや違う。明るいに金だ」

「明るいに菌…何だか汚いつすね」

「何が？」

「どんな菌つか」

「明るいに金…金、金曜日の金だぞ」

「ああ、明るいに金曜日の金つかね」

「じゃなきや、めいこんとは言わないだらうが」

「そうですね、あはは」

「…メゾン・デ・孝明、」

「メゾン・デ・孝明、ぶぶつ、何度も聞いても笑えますね」

「次聞いて更に笑うなよ」

「なんすか」

「部屋名だ」

俺の言葉に期待を隠せない加藤の様子が受話の向いから伝わってくる。

「何号室つか？」

「レ・ミゼラブル室だ」

「は？」

「レ・ミゼラブル」

「レミ イズ ワンダフル？ なんつかそれ。ぶぶつ。楽しそうですね」

お前もか。

ため息をつき俯く頭の中から冷たい汗が頬を伝つて携帯を濡らした。

「レ、中黒」

「レ、中黒」

「ミ、ゼ、ラ、ブ、ル、だ」

「ミゼラブル…つと。レ・ミゼラブル？ なんつか、それ。ぶぶ

「ぶー」

「笑うな、俺は泣きたい」

「分かりました。これで無事に荷物送れます。明日には着くようになりますから」

「ああ、頼むよ」

「了解つす」

荷物は明日か。

今日はやつぱりカツプ麺丸かじりの夕食か。

そんなことを考えながら電話を切つた。

窓を打つ風も弱まつていた。

そつとベランダの窓を開けてみる。

斜め前に横たわるじぶのような池はますます濁り、蓮の葉の上に特大級のガマカエルが座り込んで一階の俺を見ていた。  
しばらくゴロゴロと喉元を震わしじつと俺を見ていたが、飽いたのか一つベロンと瞬きをすると重そうな身体をひねつて濁つた水へと消えていった。

腕時計を見ると四時半を指していた。

窓を閉め部屋に振り返ると同時に、壁にかかった内線電話から「コンシールジュです、コンシェルジュです」と肉声が聞こえてきた。  
ビビッたが、それがコール音だということに数秒後気づいた。

「これも肉声か」

俺はおそるおそる「コンシールジュです、コンシェルジュです」と繰り返す白い内線用電話の前まで進み、そつと受話器を持ち上げたのだった。

## お茶でも飲みませんか

「はい、近藤です」

「あ、もしもし？ 近藤さん？ 「コンシェルジュ」ですか？」

「管理…内藤さんですか？」

「ええ、コンシェルジュです」

受話器の向こうで微妙に高い内藤コンシェルジュの声が響いていた。どうしても管理人と呼ばせない、そんな内藤コンシェルジュの意気込みに少々感心しつつあつた俺は素直にコンシェルジュと呼ぶこととした。

「どうしました、コンシェルジュさん」

「いやいや、特に用はないんですけどね。落ち着いたら連絡くださいって言ってから数時間経つてますんで、どうしてるか気になつて」「そうですか、わざわざすみません、気にかけてもらつて」

「いえいえ。倒れてたりしたら私が困りますからね」

「… そうですね」

「で、落ち着きました？」

落ち着くも何も、引越し荷物を整理しているわけでは無かつたし、手を揉んでいたと言えばヘルメットの意外な効果に右往左往していたくらいなので、別に「まだ落ち着いてません」などと返事をする必要も無かつた。

「ええ、落ちました」

「近藤さん、引越し荷物も何もまだ来てないみたいですが、どうされたんですか？」

「なんていうか、斎藤部長の手違いで、明日になるんです、大きな荷物は」

「そなんですか。それはそれはお氣の毒に」

「氣の毒、ですかね」

「じゃあ、必要な物全てが、今日はなんにも無いって事ですよね」

「そうですね、な～んにもあつませんね」

「レ・ミゼラブル」

「…そんな感じですかね」

「近藤さん、どうです？　お茶でも飲みに来ませんか、私の部屋まで」

何だろう、軽く馬鹿にされてる感じが非常にするのだが、コンシェルジューの微妙な言葉回しに頭で反抗することすら出来なかつた。完全に頭に来る前に巧妙に話をずらされる感がある。なかなかの腕前だ。

なんて感心しているとコンシェルジューは更に続けた。

「今夜のご飯も無い状態でしう？」

「カップ麺は持参してるんですけども」

「お湯、沸かせないでしょ、やかんとか無いですか？」

「ええ、困つてるんです」

「乾燥麺、丸かじりでもしようかと考えてたんじゃないですか？」

「良ぐご存知で」

「何でもお見通しですよ

「え？」

「つて言つたら気味悪いですよね。カップ麺と聞いて、そうなんじやないかと思つただけです」

「… そうですか」

「ま、とにかくお茶でも飲みに降りて来てください」

「ええ、これから伺います」

何だか嬉しそうに笑つたコンシェルジューは「お待ちしています」と言つてから電話を切つた。

ヘルメットを被つたままだつたことに気づいた俺は頭からヘルメットを外し、軽く髪を整えてから自室を後にし、コンシェルジューの部屋へ向かつたのだった。

部屋を出ると、赤い鎧びた郵便受けに紙切れが挟まつていた。

訝りそれを手にすると『灯流さん感想ありがとう！ 水沢』とボーラーペンで綴られていた。

「なんだ？」

俺は灯流さんでは無い。以前のこの部屋の主か。良く分からん。ますますこのアパートの実態が分からなくなっていた。

一階へ繋がる階段は雨に濡れてびたびたに濡れていた。

赤錆が覆うその階段の隅には、一段毎に青蛙がひつそりと座っていた。

最後の一段の隅に田をやると、そこには蛙ではなくザリガニが陣取つていた。

久々というよりも、都会で生まれ育つた俺は生のザリガニなんてちゃんと見たことがなかつた。

ハサミを持ち上げながら俺を威嚇するその姿に、初めエビか何かだと思つてびびつたが、教科書に描かれていたザリガニの写真を思い出し、それがそうであると理解するまでに時間はかからなかつた。

「普通にザリガニで出没するんだな」

まだ威嚇を続けるザリガニの横を通り過ぎ、内藤コンショルジュの部屋の扉の前に立つ。

すっかり小雨になつた雨は、緩い風に吹かれて俺の顔をさわさわと撫でていた。

崖を下る雨は落ち着き、その上の木々も今では活き活きとその縁を広げている。

土から昇るミニマズの匂いは程よい土の匂いに変わつており、夏草の香りと共に俺の鼻をくすぐつた。

ちよつといい気分になりながらコンショルジュ部屋の呼び鈴を押した。

「ボンジユール！ ボンジユール！」

「……」

忘れてた。

この肉声を。

いい気分はすっかりどこかへ吹き飛び、目の前は瞬時に内藤コンシエルジューの揺れる腹の幻影げんえいでいっぱいになつた。

「はいはい、近藤さんですか？」

「そうです、近藤です」

「早かつたですね」

「一階からですかね」

早いのは当たり前だらう。そう突つ込みたい気分を抑え扉が開くのをしばし待つた。

「ボンジューール！」

「…どうも」

何故ボンジューールなのか。

呼び鈴の音といい、内線電話の呼び出し音といい、このコンシェルジューの挨拶といい、先ほどから何度もこの「ボンジューール」を耳にしていることか。

ここがフランスでは無いだけに、その違和感は大きくなる一方だつた。

「お待ちしてましたよ、せや、『もうお上がりください』」

「失礼します」

「狭いですけどね」

同じアパートに住まつてているのだ、狭いのはお前の部屋も俺の部屋も変わりないだらうが。

突つ込みどころは数あれど、それをさせないコンシェルジューの変な存在感にやや圧倒されつつ部屋に上がりこんだ。

「お邪魔します」

玄関を入れると台所が広がる。

その向こうに六畳部屋が見える。

俺の部屋と全く同じ作りであることは間違ひなかつた。

「今お茶入れますからね、その座布団の上に座つていてください」

「はい、すみません」

内藤コンシェルジューは軽く微笑むと、狭い台所のやかんの口を開き、

湯気の昇り具合を確かめてから急須にお湯を注ぎ始めた。

俺は通された六畳部屋をぐるりと見渡した。

尻の下に引かれた座布団は紺色でふかふかの綿が詰め込まれており、明らかに客用ではあつたがそれが使われたであらう回数は非常に低いことを物語つていた。

コンシェルジユの部屋といつともあつて、どんなにおフランス風なのだろうと半分期待して入つてみたのだが、残りの半分のどうせバリバリに日本風に違いないといつ諦めのほうが勝つた部屋であった。

天井を走る壁には観光地土産のちゅうちんがずらりと並び、目の前にあるテーブルは丸いちゃぶ台、壁に添えられている茶箪笥はつやつやとした木目が美しすぎる純日本風のものだつた。

「ん？」

良く見ると茶箪笥の上には東京タワーの置物がぽつりと立てられていた。

その隣にはそれよりも少し背の高いエッフェル塔の置物が立つている。

茶箪笥の中に皿を盛りすと、フランス国旗のペイントが施されたローハーカップとソーサーのセットが一組並べられていた。

「やや、お茶入りましたよ」

たぶたぶと腹を揺らしながらコンシェルジユがお茶の入つた湯のみを俺に差し出した。

「あ、どうもすみません」

「いえいえ、なんのお構いもできませんで」

「いただきます」

「熱いですから気をつけてくださいね」

言いながらコンシェルジユが俺の向かいに腰を下ろす。

タンクトップから少しあみ出した腹に噴出しそうになつた俺は、湯飲みに息を吹きかける風を装い、思わず漏れそうな笑いを誤魔化した。

「荷物は明日着でしたっけ?」

「ええ、そうなんですね」

俺と内藤コンシェルジュは向かい合つたままひたすらお茶を啜つていた。

「おかわりどうですか?」

「あ、いただきます」

「お茶つば交換しますね」

茶菓子一つ出てこない内藤コンシェルジュの眞の利かなさに内心うんざりしていた。

「近藤さん」

「はい?」

「なんでお茶菓子の一つも出でこないんだろ?とか考えていませんでした?」

「へ?」

何でだ、何故分かる?

「私だつたらそう思いますからね。お茶飲みに来ませんかと言つておいて本当にお茶だけかつてね」

「は、はは」

「出でないわけじゃないんですよ、冷やしてるんですよ

「冷やす…?」

内藤コンシェルジュは立ち上がると流しへ向かつて冷蔵庫のドアを開けた。

今更気づいたのだが、そこにある冷蔵庫はこの狭い部屋に似つかわしくないほどデカイ。

もはや業務用サイズはあらうかといつその冷蔵庫をパタンとしめるど、「上出来上出来」と上機嫌のコンシェルジュが取り皿と共にそれを手にして六畳部屋へ戻ってきた。

「シュー・ア・ラ・クレーム シュルブフレ?」

「シュー・アラ? クレーム?」

クレームといふ言葉の響きに営業といつ立場上異常に敏感になつて  
いる俺は瞬時身構えた。

「シュー・ア・ラ・クレーム。シュークリームです、どうですか？」  
甘いのお嫌いですか？」

「シュークリーム…」

「シュー・ア・ラ・クレームです。シュークリームといふ言葉は本  
来存在しません」

「はあ」

「シュー・ア・ラ・クレーム。フランス生まれの立派なお菓子です。  
シューとはキャベツのこと。ボコボコッと膨らんで焼けた形がキャ  
ベツに似ているところからこの名前が付いたんです。  
もともとは何か他の料理を作った時に余った生地を捨てるのがもつ  
たいないので焼いてみたらできちやつたなんて説もあります」

「…お詳しいんですね」

「そうですかね、常識かと思つてました」

「…そうですか」

「甘いのお嫌いですか？」

「いえ、大好きです」

「それは良かつた。たくさん焼いたのでいっおい食べてつてくださいね」

「これ、内藤さんが作つたんですか？」

「ええ、好きなんですよ料理。特にフランス菓子作り」

「へえ…」

俺はもう一度内藤「ンシユルジュの姿をマジマジと眺めた。  
タンクトップにハーフパンツ。

このオヤジがこの纖細なシュー・ア・ラ・クレームを作つたのか…  
俄かには信じ難かつたが、流しに散乱する強力粉やふるいなどを田  
にするとその疑問は静かに引いていった。

「日本茶にシュー・ア・ラ・クレーム、これがぴったりなんですよ

「そうなんですか」

「と、私が思つていいだけですけどね」

「…いただきます」

一つを手にし、そつと口をつけると、中からトロリとしたクリームが舌先に絡みついた。

それは驚くほど纖細で美味で芳醇で…なんとも例えようの無い、まさに初めて口にする最高のショーケリーでした。

「これ、すごく美味しいです。すごいです、このショーケリー」

「シュー・ア・ラ・クレームです」

「このショーエ・ア・ラ・クレーム、すごく美味しいです」

「お口に合いますか？ それは良かつた」

「今晚はこれでしおげそうです」

「それも良かつた。私も夕食は殆どフランス菓子なんですよ」

「へ？」

「フランス菓子好きが災いしてつて言いますかね、こんなお腹になつてしまつて」

はははと笑う内藤コンシェルジュの腹が揺れる。

毎晩、こんなに大量の甘いものを食つてしているのか。

それでその腹なら納得できる。

俺はシュー・ア・ラ・クレームをこれでもかといふくらい遠慮なく腹に押し込んだ。

「ご馳走様でした」

「いえいえ。こんなに食べていただけて嬉しい限りです」

口の周りに付いたクリームをハンカチで拭い、俺はコンシェルジュに頭を下げた。

「荷物が明日つてことは、明日から本格的なこのでの生活が始まるつてことですね」

「ええ、そうですね。あ、そうだ、引越しの「挨拶もちゃんとしませんで…すみません。何せ、挨拶用と思っていた品々なんかもあつちに残してしまったもので」

「そんなのいいですよ、近藤さん」

「そういうわけにはさせんよ」

「それもそうですね」

「…」は…このアパートは内藤さん以外に四人いらっしゃるんですか？」

「ええ、各部屋にいらっしゃいます」

「その方達にもきちんと挨拶しないと」

「そうですね」

「そうなのだ。

引越しの挨拶にと思って準備していたタオルがあつたのだが、それもこれも全部東京に残してしまった。

挨拶回りは明日にするしかない。

俺も抜けてるな、と頭をかくより仕方なかつた。

「ここ」の住人は皆親切ですよ

「そうですか」

「ええ、楽しい方ばかりです」

「それは良かった」

「ところで近藤さん」

「はい？」

「今日はもう夜ですから明日にでも改めて説明しますけどもね、このアパートには色々な規則がありましてね」

「規則ですか？」

「ええ、そんなところです。規則っていう規則でも無いんですけどもね、決まり事といいますかね」

「決まり事」

「ゴミユニークーションの一つとも思つていてください」

「はあ」

「何だろつ。

ゴミだしのルールとか、何時以降は洗濯機を回さないとか、朝はちゃんと挨拶するとか、そんなものだろうか。

その時の俺は、常識に則つた規則を考えていただけだった。

後にそれはとんでもない規則…回覧板とこうことだと判明するのだが、シュー・ア・ラ・クレームを内藤コンシェルジュと向かい合つて食したこの日にはてんてこ舞いにならなくて済んで見当が付かなかつた。

「もう一杯いかがですか？」

「いえ、もう結構です。」と駆走さまで

「そうですか。私はあと一杯くらい飲みたい気分なんですけど

「あ、じゃあ、俺もいただきます」

「無理してませんか？」

「…してません。むしろ飲みたいなと思い直したところです

「良かった」

やかんからジョロジヨロと急須にお湯が注がれる。

その湯気の立つ注ぎ口を見つめる視線の向こうに微妙にくくくつと揺れるコンシェルジュの腹が小刻みな運動を繰り返していた。このコンシェルジュ、侮れない。

そう感じながら再び入れられた日本茶をかぼかぼと音を立てての腹に注ぎ込んだ引越し初日の夜だった。

## 引越し屋の正体

散々日本茶をお代わりさせられた俺は「では、また明日伺います。おやすみなさい」とコンシェルジュに頭を下げ部屋を後にした。二階へ続く階段には蛙の姿もザリガニの威嚇するハサミも見当たらなかつた。

時計の針は七時を回っていた。

なんだかんだと内藤コンシェルジュ部屋に三時間以上も居たことになる。

日本茶の飲みすぎで腹がかぽかぽと音を立てているのも納得だつた。階段を上りながら空を見上げると、すみれ色の夜空に半月が白かつた。

月光は真つ直ぐに俺の頭に落ち、そして辺りを同じ色に染めていた。耳を澄ますと池の方から「ザーハー」と野太い声がする。

雨の中俺をじつと見上げていたガマカエルに違いない、そんなことを考えながら自室の扉の前に立つた。

郵便受けにはまた何かが挟まつていた。

「新聞いかがですか？ また訪問いたします。SHIE のメモと、もうすぐ花火大会！ 是非ご参加くださいー蓮香 のメモだつた。

「新聞…花火大会…」

そつとメモをポケットに収め、「レ・ミゼラブル」と迎える黒いドアを開き部屋に入った。

「七時かい 寝るには早いが 何も無い」思わず漏れた五・七・五に自分で呆れた。テレビもラジオも何も無い。

あるのはヘルメットだけだ。

ため息をつき、流しの蛇口をひねつた。

一瞬ごぼっと音を立てた蛇口ではあつたが、次の瞬間にはどう一つと勢い良く水が流れ出した。

ほつとした。水道は通つてゐる。

べたべたの身体を洗い流したかった。

そのまま風呂場のドアを開け、俺はシャワーを浴びた。

カルキ臭さの欠片かけらも無い、田舎の水に感動した。

すつきりした俺はやることも無かつたのでヘルメット磨きなどをしながら時間を潰した。

何だかんだと言つて身体は疲れていたのだろう。

布団も何も無かつたが六畳部屋で「口口口」としていた俺はいつの間にやら眠つてしまつたらしい。

気づいた時にはベランダの窓から燐々（せんせん）と朝日が射し込んでいた。

その眩しさに目を覚ました俺は窓を開け、半ば腐りかかっているベランダに素足で降り立ち、不細工に水色に塗られた柵に手をかけ外の空気を肺一杯に吸い込んだ。

「つまい」

空気がこの上なく重かつた。

朝露に濡れた緑の稻が太陽の光に輝いている。

その間を縫うように白鷺しらさぎが長い羽をゆつくりと動かし飛んでいた。

「悪くない」

明金二丁目の朝は気持ちのいいものだった。

左右に伸びる一本道を右から左に視線を動かすと、ずっと向こうに青い軽トラ軽トラックがこちらに向かつてガタガタと近づいていた。

荷台には幌ほらが掛けられ、酷く揺れており、その隙間から何やら見覚えのある生地が見え隠れしていた。

「あれ？」

近づいてくる軽トラックが次第に鮮明になつて目に入る。

「間違いない、俺の抱き枕だ」

荷台からベロンとはみ出したそれは俺が五年以上愛用している抱き枕だった。

「なんだ、何で俺の抱き枕がはみ出てるんだ」

いや、訝るのはそこじゃなかった。田を凝らすと見覚えのある顔が

二つ。

「まさか」

運転席に若い男、助手席に口を半開きにし爆睡するオヤジ。二人とも頭には黄色の何かが乗つかった。

「おい…」

俺は慌てて部屋に戻り、ヘルメットを装着した。しつかりと立つ一本線。

加藤の番号を表示させ、即効でボタンを押した。

そのままベランダへ戻り、再び軽トラックを見守る。

急ブレーキを掛けた軽トラックがガコンと揺れ、はみ出した抱き枕がベロンと回転した。

助手席側のオヤジがフロントガラスに頭をぶつけ、何やらわめいている。

「もしもし？ 先輩つすか？」

携帯の奥から加藤の高い声がする。

軽トラックの運転手をみるとやはり携帯を耳に当て口を動かしていた。

「お前か？」

「先輩、何つすか、お前かつて。お前かイコール加藤か？ って意味つすか？ そうです、加藤です」

「どうしたんだ？」

「自分で掛けとおいてどうしたんだって事はないでしょう、それは俺のセリフですよ」

「そもそもそだ、すまん…いや、そつじやなくて」

「そうじやなくて？」

「じつちだ、じつち」

「じつち？」

「そのまま斜め右前方のアパートを見ろ」

「斜め右前方？…あ！」

「やつぱりお前か」

「いや～～先輩！ こんな朝つぱらからお出迎えですか！ 嬉しい

なあ」

窓から身を乗り出す男がぶんぶんと手を振っている。頭の上の黄色… もはやヘルメットには違ひなかつたが、その頂上の銀色の触覚が陽光に反射し俺の目を攻撃した。

運転する男は案の定加藤だつた。

その隣で額ひたいをフロントガラスにピタリとくつづけてオヤジがこちらを凝視している。

「斎藤部長か」

「俺つすよ、加藤ですよ」

「いや、そうじゃなくて隣り」

「ああ、そうです、部長です、代わりますか？」

「いや、いい」

「しかし何してるんつすか先輩、トランクス一丁にヘルメット被つて。超ウケるんつすけど！」

ぶぶぶつと吹き出す加藤の隣りで斎藤部長も腹を抱えていた。

俺は自分の姿を見下ろした。言われてみれば何だこの格好は。変体が越してきたと思われても仕方のない、中途半端なお笑い芸人ではないか。

いやいや、それよりも触覚付きヘルメットを被り青い軽トラックに腰を下ろすお前らもなかなかのもんだぞ。どの辺りからその格好で運転してきたのだ。

「何でお前と部長が居るんだ」

「何でつて引越し荷物を運んで来たんつすよ

「は？」

「夜通しで」

「何でお前が」

「ちょっと色々ありまして。で、先輩そこにヘルメット被つてそんな格好でいるつて事はそこが先輩の部屋つすね

「ここにヘルメット被つてこんな格好でいるからここが俺の部屋つてわけでは無いぞ」

「ぶつ！ オモロイっすね、先輩」

「いいから静かにこっちに向かってこい。分かつたな」「了解っす！」

そう言うと軽トラックは再び動き出した。

メゾン・デ・孝明の前に止まつた軽トラックから加藤がブンブンと手を振つてゐる。

俺は「しーっ！」と唇に指を当て、加藤の高い声が上がる前にそれを阻止した。

「とにかく静かに上がつて来い」と小声で加藤の頭に声を掛けると「うんうん」と頷いた加藤が降りてきた。

その後に続いて「よつこらせ」と齊藤部長が降りてきた。

そんな様子を例のガマカエルがやはり蓮の葉に乗つかり、じつと見つめていた。

## 斎・近・加、揃っちゃいました その1

俺は急いで玄関の扉を開けた。

音を出さないように慎重に階段を踏みしめる加藤に続いて、何も考えずドスドスと上がってくる斎藤部長の順でまもなく一階の踊り場に到着するところだつた。

二人ともしつかりとスース姿だつた。

事務所でいつも見ていた姿に変わりなかつた。

ただし、頭にしつかりと装着する黄色の…それも触覚付きのヘルメットが乗つていることを除いてはだが。

踊り場に付き、ドアから顔を覗かせる俺に気づいた加藤の顔が一瞬ほころぶ。

上がつた口角が開こうかというその顔の動きを見て取つた俺は、慌てて「しーつ！」と人指し指を唇に押し当てた。

やや小走りに加藤が玄関に滑り込んできた。

頭だけを突つ込み、部屋の中を確認するよにしてから斎藤部長がそれに続いた。

何も無い六畳部屋に、斎藤、近藤、加藤の「再婚か!」コンビが揃つた。

この光景を何も知らない人物が突然訪ねてきたとしたら、一体どう思うのだろう。

スース姿にパンツ一丁の男が三人。それならまだいい。しかし三人が三人とも触覚付きヘルメットをしつかりと装着している。

何の儀式だ。

それともただのアホか。

「レミはどこだ?」

先ほどから落ち着き無くキヨロキヨロと部屋中を見渡していた斎藤部長の第一声はそれだつた。

「そんな人、居ませんよ」

まだ理解できていないのか。呆れる俺を前にして斎藤部長は尚も続けた。

「じゃあ、編む嬢、レミ イズ ワンダフルはどうだ?」

「…部長の言ひ方のレミと、今の編む嬢、レミ イズ ワンダフルはきっと同一人物のことです」

「そうなのか」

「いや、分かりませんが、おやじく。そもそもレミなんて最初から存在しません」

「いや、居る。お前が電話で言つただろう」

「部長が作ったんですよ、編む嬢、レミ イズ ワンダフル」

「お前が居ると言つたんだ、編む嬢、レミ イズ ワンダフル」

「そんなこと、一言も言つてませんよ」

「いや、言つた」

「言つてません」

「いや、言つた」

「言つてませんつて

「匿つてゐるのか」

「何で俺がレミを匿う必要があるんですか

「やつぱり、居るんだろう」

「だから居ませんつて」

「逃げたか」

「…そうかもしません」

どうしてもレミを諦めきれない斎藤部長に根負けし、否定する」といふことを諦めた。

「どんな女ですか、そのレミっていう人」

ベランダから外を覗いたり、隣りの三畳部屋を歩き回つたりして、加藤が興味深そうに俺と部長の会話に混じってきた。

「…お前もか」

「へ?」

「いや、いいんだ。何処かへ行つたらしい」

「へえ。先輩が越してきたからですかね」

「… そうかもな」

「戻つてきたら紹介してくださいね、先輩」

「… ああ。あくまでも、戻つてきたら… の話だけどな。そしたら俺も会つてみたいよ」

加藤の代わりに強く首を上下し、額つなづく齊藤部長の広い額に陽光が照  
かっていた。

## 齊・近・加、揃つちゃいました その2

「ところで」

ひとしきり存在しないレミの話を交わした後で、俺はレ・ミゼラブル室に「再婚か！」トリオが何故か揃つてしまつているの状況の確認を始めた。

「加藤、どうしてお前が俺の引越し荷物を運んで来たんだ、しかもこんな早朝に」

「俺もだぞ」

間を居れず齊藤部長が口を挟んだ。

「…見れば分かります。どうして一人して引越し屋の真似事をしてるんですか。俺の抱き枕なんて既に落下寸前じやないですか」いや違つた。抱き枕優先で話をするつもりは無い。俺は言葉を選びなおし話を続けようとした。

「レミは…」

「居ませんよ」

レミの話を振り返そうとする齊藤部長の言葉をあつさつと否定することに成功した俺は、加藤に向き直り再度確かめた。

「加藤、業者はどうした？ 何でお前が運んできたんだ？」

「いや、確かに業者は手配したんつすよ」

「…齊藤部長のことか？」

「そんなわけないでしょ、先輩も変なこといいますね、あはは」

「…お前に電話したとき、これから業者に積み込みさせますからつて言ったよな」

「ええ言いました。その予定だつたんですよ

「予定？」

「ええ。それがですね、在りえないことが起きたんです  
「在りえないこと？」

「ええ。引越し屋が来るはずが、何故か来たのが宅配業者だつたん

です「

「は?」

「こんな荷物は引越し屋に頼んでください、なんて言いやがるんで、頭に来て帰したんですよ」

「…加藤」

「はい」

「手配したのはお前だよな」

「ええ」

「で、来たのは宅配業者だったと」

「そりなんつすよ、びっくつしましたよ」

「…俺がびっくりだ」

「先輩もですか! ですよね」

「…加藤」

「はい」

「悪いのは誰だ」

「…すみません、…俺です」

呆れてそれ以上口を開けなかつた。

引越し作業をするのに宅配業者を手配するひとは。

「しかし…」

俺はそこで考えた。

幾らなんでも馬鹿過ぎる。

加藤がこれほどまで馬鹿だつたとは思えない。

抜けてる部分は多々あれど、あれだけ「任せください」と言い、米と水までしつかりと三箱分準備してくれていた加藤がここまでアホなミスを犯せるとは考え難かつた。

そして「俺です」と続けるまでにやや間があつたことに何となく引つかかつた。

「…加藤」

「はい、先輩」

「お前が引越し屋…結果的に宅配業者を手配したのは分かつた」

「はい、先輩」

「なにで調べた？ 黄色い表紙のあれか」

「いえ」

「まさかとは思うが」

「たぶん合ってると思います」

「やっぱり」

「ええ。俺もちゃんと事前にチェックしてべきだったと。CMでも言つてますし」

「聞いたのは？」

「電話番号だけでした。そこの詰めが甘かつたです、すみません」

「で、僅かばかり責任を感じて…」

「ついて来たんです。先輩には言うなと言われたんですが、次第に小声になる加藤の顔を見つめた後、一つため息をつき俺はゆっくりと後ろを振り返った。

腐りかかつたベランダのさすくれに引っかかったのだらつ、無理に引っ張つてゴム部分がくるぶしまでずり下がつた黒い靴下をびろんと伸ばしながら、尚もさすくれと格闘する齊藤部長。ついにさすくれに負けた部長の左足から伸びきつた靴下がスponと抜け、そのまま後ろに尻餅をついた被り主のヘルメットが水色の柵にゴツリと鈍い音を立てた。

「…平和だな」

「そうつすね」

そのまま座り込み、靴下をさすくれから引き剥がしにかかつた部長のヘルメットの触覚が光つている。

その向こうに青々と連なる木々をバックに、触覚は殊更銀色が際立つていた。

羽を休めるため、カラスが木のてっぺんに降り立つた。

齊藤部長越しに見えるその姿は、ちょうど触覚のてっぺんでもつていた。

その場所で「バカアーバカアー�」と繰り返すカラスに、「何でし

つくりとくる光景なんだ……」と漏れた自分の言葉は間違つていないとと思うことにした。

斎・近・加、揃つぢやいました その2（後書き）

## 齊・近・加、揃つちやいました その3

齊藤部長の靴下がささくれから無事引っ剥がされると、触覚のてっぺんに見えるカラスも朝日に煙る空の向こうに飛んでいった。山の上に顔を出す太陽は、斜めからその光を六畳部屋に注ぎ込んでいる。

引越し荷物をガタガタと運び込むにはまだ早すぎる時間帯だった。こんな朝っぱらから階段の昇り降りを繰り返していたら、アパートの住人と挨拶を交わす前から嫌われるはめに成りかねない。とりあえず太陽が山の上からすっかりと顔を出し、部屋に伸びる影が程よく短くなつてから運搬作業を開始することにした。

それまでの時間、俺たち三人は六畳部屋の中央に互いに腰を下ろし、加藤が買つてきた缶コーヒーを啜りながら時間を過ごした。何故スーツ姿なのかと加藤に尋ねたら、齊藤部長がトイレに力みに行つてゐる隙を狙つて俺の耳元で囁いた。

「仕事で来たということにしとけて言つたんで」

「仕事?」

「ええ、ヘルメットの効果が本物かどうかちゃんと確認するためつていう」

「そりゃ」

「実際、部長が先輩からヘルメットの話を聞いて、それを社長：つていうか社長つてどこにいるんっすかね。ま、それはいいんですけど、社長からも確認してこいつて言われたみたいですよ」

「そりゃ、社長にはちゃんと話したんだな。それは良かつた。で、お前までもがどうしてスーツ姿なんだ」

「部長に言われたんですよ。俺だけスーツつていうのも変だらつて」

「巻き添えをくつたわけか」

「ええ。でも俺はちゃんと着替えを持ってきたんで大丈夫です。部

長は手ぶらで来ましたけどね

「だろうな」

責任を僅かばかり感じていたとしても、部長が進んで引越し作業を手伝つようなことは無いだろうと思つていたので、その辺は特に気にも留めなかつた。

晴れ晴れとした顔つきで部長が部屋に戻つてきた。

その顔を見つめながら、部長が俺と加藤に向かいに腰を下ろすのを確認してから話を切り出した。

「部長、社長は何て言つてました？ 摩訶不思議なヘルメットについて」

慢性のちが痛むのだろう、畳に押し付けたケツを揺らしながら部長が口を開いた。

「座布団は無いのか」

「見れば分かるでしょう、何も無いんですよ、まだこの部屋は」

「あれ持つてくるかな、あの荷台からはみ出した変な模様の長い何か」

「それ、俺の抱き枕ですよ。それだけは止めてください。つていうかその話じゃなくて、ヘルメットですよ、社長は何て言つてたんですか」

「ああ、とにかくそれが本当かどうか確認して来いとな」

「それからネーミングとか諸々のことを考え直すつてことですか」

「そうなるだろうな。全てはそれからだ」

「じゃ、まだヘルメットを売り歩くことはしないほうがいいってことですね。ま、脳を鍛える摩訶不思議なヘルメットとして売り歩いたつて当然卖れないでしようし」

「そうだな」

三人ともまだヘルメットを装着したままだつた。

俺と部長の話を隣りで聞きながら携帯をいじつていた加藤が感心した顔つきで俺にそれを見せてきた。

「先輩、すごいですね。ほら、俺の携帯もちゃんと線が立つてます

「ああ」

「いつ先輩から電話が来てもいいよ」と、向こうの先輩の部屋を出るときから被つてきたんですよ。首都高とか走つてるときなんか、隣りの運転手とか物欲しそうな顔して俺たちを見てましたよ」

「…それは別の意味で見てたと思うけどな」

出るときから一人して被つてきたのか：さすが部長と加藤だと改めて感心した。

その隣りで斎藤部長も己の携帯を開いていた。覗き込むとその古すぎる携帯も電波状況は良好であることを示していた。

「でも先輩、俺の携帯、ずっと線立つてますよ」

「…あたりまあだろ？ ずっとその格好できたんなら。ヘルメットを外してみる」

俺の言葉に加藤が「そつか」と呟いてからヘルメットを脱いだ。それを見ていた部長もヘルメットを外した。薄い髪は汗で立ち上がり、年をとつたキュー・ピーはきつとこんなだろ？ という姿に見えた。

「おお！ 本当に圈外だ」

大袈裟に驚く加藤がもう一度ヘルメットを被りなおす。「おお！ 入つた！」とまた大袈裟に驚きながら何回かその作業を繰り返した。部長もヘルメットを被りなおした。その顔には少しばかりの驚嘆が映つていたが直ぐにいつもの無表情へと変わっていた。

「ね、部長、俺の言つたことは本当でしょう？」

「ああ本当だ」

「これでちゃんと社長に報告できますよね」

「そうだな」

「ちゃんと報告してくださいよ」

「ケツが痛くて叶わん」

「…聞正在るんですけど、人の話を」

「聞正在る。ケツが痛いんだ」

「それは分かりました。もうすぐ日が高くなりますがそれまで少し辛抱してください」

「オーライ。つまり分かった

「またですか」

「何が?」

「いえ、なんでもないです」

部長の中途半端なルートを聞きながらしばしの時間を過ぎました。  
時計の針が九時を示す頃、俺たちは立ち上がり、荷物の運び込みを開始したのだった。

斎・近・加、揃つちゃいましたその1・2・3は、後日「斎・近・加、揃つちゃいました」にまとめさせていただきます。

## カレー、カレー、そして加齢

軽トラックに積み込まれた俺の荷物はさほど<sup>ほど</sup>の量では無かった。向こうを出るときに必要なものとそうでないものの分別はきつちりと済ませていたのだ。

一生この町に住むわけでは無い。

ので、極力必要分だけを移動させることにした俺の荷物は、三人掛かりで運んだこともあつて三時間程度の作業で無事部屋へ運び込まれた。

ちっぽけな冷蔵庫にレンジ、ブリキにタヌキに洗濯機…もとい、電気釜にテレビに洗濯機といった家電類はその程度で、後は適当な着替えに家庭用品、一応こたつ兼テーブルに、加藤の用意した水と米のダンボール、布団一組、そして忘れちゃならない大事な抱き枕…そんなもんで狭い六畳部屋は部屋らしい部屋となつた。

階段の上り下りの途中、コンシェルジュと顔を合わせた俺は、「しばらくの間、バタバタと騒がしいと思<sup>い</sup>りますがすみません」と理を入れた。「暑い中、ご苦労様です」とにこやかに腹を震わせたコンシェルジュから麦茶の差し入れを一度預いた。

部長がコンシェルジュに挨拶をすると、誘われるままにその部屋へ消えていった。

そのまましばらく戻つてこなかつたので、実質荷物は俺と加藤とで運んだようなものだつた。

コンシェルジュとは顔を合わしたが、不思議なことに他の住人と出くわすことは無かつた。

それどころか、ガタガタと騒がしい俺の部屋周りを除いては、他の各部屋は妙にしん…と静まり返つており、人の出でぐる気配さえ感じられなかつた。

ブルーのカーテンをベランダに取り付け、「ふー」と一息ついたと

「」の程度部屋の中も整理がついた。

「よし。住める部屋になつた」

「良かつたつすね」

「ああ、夜通し運んできたからお前も疲れたろ？」「苦労さんだな、  
加藤」

「ぜんぜんつすよ。そもそも俺の確認不足ですから」

「いや、そもそもは部長せいだろ？」

「そつなんですけどね」

「夜通し運転してきたのもお前だろ？」「部長は寝つっぱなし  
だつたんだろ？」

「隣りで大イビキでした」

「だらうな」

「イビキは煩いし、歯ぎしりは酷いし、拳句のはてに鼻の曲がるよ  
うな凭れた屁はするし最悪でしたよ」

「酷いな」

「加齢臭もするし。しかもホントにカレーっぽい匂いなんつすよ」

「…じんな加齢臭だ、それ」

「寝言もいつぱい言つてました」

「どんなん？」

「隣りの密はよく柿食つ密だ、とか

「…なんだそれ」

「赤巻き紙 青巻き紙 黄巻き紙、とか」

「…蛙ひよこひよこ…なんとか、とか？」

「そう、それつす」

「…ある意味凄いな」

「ええ、全然噛まないんつすよ。びつくつしました」

「他には？」

「寝耳にウォーター」

「…また覚えたか」

加藤と二人、部屋に大の字になりながら話をしていた。

すっかり真上に昇った太陽は容赦なく部屋の気温を上げていた。

エアコンは完備されていたが、埃を外へ逃がすためにベランダの窓を開けてエアコンは入れずにそのまま汗を流していた。

外では、アパートの壁にへばり付いてるのではないかと思つほど<sup>のびほど</sup>の蝉時雨<sup>せみしぐれ</sup>が降り注いでいた。

時折さわりと部屋に流れ込む風が、汗のしたたる身体を撫でて幾分か気持ちが良かつた。

寝転がつたままで外を見ると、ただ真つ青な空が広がっていた。都会のように隣の屋根やらビルの頭といつたものに邪魔されなく、そこに青々と横たわるブルーの真ん中を、飛行機雲だけがすっと鉄<sup>はさみ</sup>を入れるように過ぎていった。

加藤は隣りで寝息を立てていた。

その姿を横目に入れながら、俺もいつの間にか眠っていた。

「…どう…近藤」

遠くで誰かの声がする。しかし至極<sup>じゆく</sup>近くでカレーの匂いがする。そう思いながらゆっくりと目を開けた俺の真上にキュー<sup>ピ</sup>ー頭の齊藤部長の顔があつた。

「つ、わあ！」

加藤の言つていたカレーの匂いの加齢臭はこれだつたのか。まだ寝ぼけ氣味の頭の奥でそう思いながら飛び起きた。

「人の顔を見てそんなに驚くことはないだろうが」

不服そうな顔を向けながら齊藤部長が文句をつけた。

「そんな至近距離で覗き込む必要ないじやないですか」

「いくら呼んでも起きないから近づいただけだ。俺だつてお前の顔なんか近くで見たくない」

「…部長、いつ戻つてたんですか、コンシェルジュ部屋から」

「一時間くらい前だ。あのコンシェルジュ、なかなか面白い奴だな」  
言いながらにやりとする部長の周辺からは、まだカレーの匂いが立ち上つていた。

「…カレー臭い」

加藤がぼそりと咳きながら田を覚ました。

「カレーの加齢臭」

「こら！ 加藤！」

俺は慌てて加藤の口を塞いだ。

「カレー…嫌か？」

その様子をじっと見ていた部長がやや肩を落として咳いた…よつこ  
見えた。

「いや、嫌じゃないですよ、カレーの加齢臭…」

「気に入ると思つたんだがな」

「…いや、気に入りはしませんが…」

「他のが良かつたか」

「…他のつて言いますと？」

「牛丼とか」

「…微妙です」

「グラタンとか」

「…それも微妙です」

「若いもんは好きだら」

「…若いから好きつていうものじゃ無いと思ひます」

「そうなのかな」

「グラタン臭の加齢臭…好きな奴、探すの難しいと思ひます」

「何を言つてゐる」

訳が分からんといつ顔をした部長がゆつくりと立ち上がる。

そのまま流しへと向かつた部長は、ガス台の上に乗つた鍋の蓋を開けながら振り返り、じつ言つた。

「カレーだ」

「加齢？」

その言葉に加藤が別の意味で反応する。

「そうだ」

部長も別の意味で返事をしていた。

加藤と部長のとんちんかんな会話が交わされるなかで、カレーの匂いは更に部屋に充満していった。

「カレーを作ったんだ」

「へ？」

「カレーを作ったんだ、俺が」

「部長がカレーを？」

道理で加齢によるカレーの匂いにしては香りが良すぎると思つたことは口に出さずに済んだ俺の隣りで加藤が口を開いた。

「なーんだ、すっかり部長のカレーの匂いの加齢……」

ふがふがともがく加藤の口を押さえながら俺は着藤部長に向き直つた。

「部長がカレーを」

「そうだ、カレーだ」

「いつのまにカレーなんか」

「お前らが寝てる間にカレーだ」

「どうしてまたカレーを」

「コンシェルジュにカレーの箱をもらつてな。腹が減つたんで作つたんだ、カレー」

「すごいですね」

「お前らも腹が減つたろう。ああでもカレーの匂いのカレーは好きじゃないとか何とか言ってたな、お前らは食わんか。

そもそもカレーの匂いのカレーが嫌いなら、カレーの匂いじゃ無いカレーとは何なんだ、流行つてるとか、そのカレー…の匂いじゃ無いカレー…というのが

「いえ、カレーの匂いの加齢臭が」

再び加藤の口を押さえ、その頭に拳を下ろしてから慌ててフォローした。

寝起きの頭にカレー…カレー…そしてまた加齢と、もはや何の話をしているのか自分でも分からなくなりそつだつた。

とりあえず無難に返事を返した。

「いや。大好きです、カレー」

「カレーの匂いのカレーが好きなんだな」

「はい」

「じゃあ食つか、カレー」

「はい喜んで。カレー」

部屋らしくなつた部屋の中央に置いたテーブルを囲み、斎藤部長のこされたカレーを三人で食した。

途中、「部長、カレーなんて食つたら、またカレーの匂いの加齢」と加藤が米を吹き飛ばしながら言いかけたところを再び拳で制したのだが、斎藤部長は「カレーの匂いじゃ無いカレー」の言葉がよほど気にかかっていたのか、何度も「カレーの匂いじゃ無いカレーとはどんなカレーなんだ」と俺に聞いてきた。

カレーの匂いでいっぱいの部屋にカレーと加齢の言葉が幾度と無く飛び交い、夏のくそ暑さに拍車を掛けた。

部長の作つたカレーがむやみやたらに辛かつたせいもあつて、三人ともカレーの匂いの中でカレーを食いながら鬼のよつに汗を流していた午後だった。

部長の作った激辛カレーを食し、しばらく三人で六畳部屋に寝転がっていた。

相変わらず降り注ぐ蝉たちの声はミンミンジリジリとそこかしこに響き渡り、テレビの電源も入れていない俺の部屋は、ただその声だけで埋め尽くされていた。

申し合わせたように時折ピタリとやむ蝉たちの声の合間に部長のイビキが入り込む。

腹の満たされた斎藤部長と加藤はアホのようになり口を開き、畳の上で眠りこけていた。

早朝に目を覚ましたとはい、昨晩わりとゆっくりと眠れた俺は、先ほどの昼寝のせいもあって一人のよう眠ることは出来なかつた。テーブルの上で空になつたカレーの皿を重ね、流しに運び極力音を出さないようにしてそれを洗う。

間抜け面で眠り込んでいる一人を起こさないようにするためだ。引越し屋の代わりに宅配業者を手配してしまつといふ考えられないミスを犯したこの一人とはい、夜通し俺の荷物を運んでくれただ。

そうそう邪険に扱つことも出来ない。一人がいなければ俺の荷物はまだ東京に残つていたはずだ。

一応それなりの感謝は心にあつた。ので一人が起きるまでそのまま放つておくことにした。

午後一時を回り、ますます高くなつた太陽が下の池を照らしている。あの大きなガマカエルもさすがに顔を出すのは厳しいのだろう。水面にはただ蓮の葉が青々と広がるだけだつた。

部長が靴下を引っ掛けたさすくれには黒い糸が残つていた。座り込み、糸くずと共に尖つたさすくれを指で無理やり引っ剥がすと、ペロンと向けた終点の木がさすくれた。

そこを掴み、またペロンと引くと再び終点の木がささくれる。それを繰り返すこと五回、ようやくベランダのをさくれは無くなつた。

「よし。これで部長が靴下を伸ばし、ベランダに頭を打ち付ける」とは、もつ無いだろ?」

立ち上がるつとし、ふとアパートの下に広がる僅かばかりの土の庭に視線を移したときだつた。

部長と加藤が乗ってきた青い軽トラの横を過ぎる影があつた。タンクトップにハーフパンツ。内藤コンシェルジュだつた。

「内藤さん」

俺は一階から内藤コンシェルジュの頭に呼びかけた。

「ああ、ボンジュー、近藤さん。部屋は片付きましたか」

「ボン…ええ」

眩しそうに田を細め、一階の俺を見上げるコンシェルジュの手には軍手がはめられていた。

「どうしたんですか、こんな暑いのに軍手なんて」

「近藤さん」

「下に降りて来ませんか」

「はい?」

「近藤さんに話しかけられて嬉しいですが、こいつって眩しいなが二階を見上げながら話をするところのは結構しどこものです」

「ああ、すみません。そうします」

部長と加藤はまだやすやすと眠つてゐる。

起こすのも可愛そうな気がするし、かといって一人で部屋にいてもすることなど何もない。

俺は近藤部長の半開きの口が広がる顔面をまたぎ、何故かその足元に頭を向けて眠る加藤の身体をまといで玄関を出た。



## めでたシメの巻(仮) もの2

玄関を開くと蝉の声はますます高くなる。階段を降りコンシリジュ部屋の前を過ぎアパートの正面側に回ると、容赦ない陽光が頭に降り注いだ。見上げる空には太陽以外の何もない。

雲ひとつない真夏の空は、すつきりとどこまでも青かった。

「ボンジュール、近藤さん」「ボンジュール、内藤さん」

空の青さに心惹かれていた俺は、何の迷いもなく「ボンジュール」などと返事をする。

あまりにもすんなり出てきたボンジュールの言葉に少し笑った。

「お部屋も片付いたようで良かつたですね」

「ええ。これで生活ができます」

「斎藤さんともう一方…加藤さんでしたっけ、ビツされました?」「疲れきってしまったようで。爆睡中です」

「そうですか」

「ええ。さつきはうちの部長がお部屋にお邪魔してしまって。すみません」

「いえいえ。誘つたのは私ですからね。なかなか面白い方ですね、斎藤さん」

「そうですか」

「ええ。何だかよく分からぬ言葉が偶たまに出てきましたが」

「…寝耳に…」

「ウォーターとか何とか。何ですかね、それ「すみません、気に入ってるみたいなんです」

「ルー語」

「ご存知ですか」

「いえ、よく分かりませんが、斎藤さんがルー語とかルーとか色々

説明されていたんで、私は話の途中から聞き流してたんですけども  
ね、あまりにもルー、ルーおっしゃるんで、ルーがお気に入りかと  
思いましてね。カレーのルーをプレゼントしたんですね

「…ああ、それでカレー」

「いい香りがしてましたから、カレー作られたんでしょう」「ええ、ご馳走さまでした」

くくくと笑うコンシェルジュと共に池の淵まで足を運ぶ。  
コンシェルジュはそこにしゃがみ込み、草むしりを始めた。  
軍手をはめていたのは、草むしりをするためのものだつたのだ。  
そういうえば…と思い、池の淵からずっと目を移動し、ぐるりとアパートの周辺を見渡す。

雑草はきちんと抜かれ、ところどころに花も植えつけである。  
これだけの田舎町だ。放つておけば雑草にアパートそのものが覆い  
隠されてしまうことになつても不思議ではないはずだ。  
それが綺麗にきちんと手入れされている庭を見て改めて感心した。

「いつも内藤さんが手入れされてるんですか」「ええ。それが仕事ですからね」

「大変でしょう」

「そうですね、これだけ暑い日は大変ですね。でも好きですから苦  
痛ではありませんよ」「池の周囲も内藤さんが？」

「ええ、そうです」

「そういうえば、ここに住んでるガマカエル、随分とデカいですね」

「え？」

「え？」

「近藤さん」

「はい」

「見たんですか」

「見たんですかって、ガマカエルのことですか」

「見たんですね」

「…ええ、見ました。一回も？」

「一回も？」

「…そうですけど、何か」

「へえ

ゴンシュルジュは俺の顔をまじまじと見つめた後、蓮の葉が広がる濁った池に向き直り、「それはそれは」と呟きながら一人領いていた。

「あの…ガマカエルが何か？」

「そうですか、一回も近藤さんに姿を見せましたか」

「あの…何なんでしょう」

「孝明」

「へ？」

「近藤さんが見たというガマカエルです」

「孝明？」

「ええ

「ガマカエルですよね」

「ええ。ガマカエルの孝明です」

「あの…もしかしてこのアパートの名前の由来って」

「メゾン・デ・孝明ですか？」

「ええ、ガマカエルから名付けたんですか」

「そうです」

当然といった顔つきで話をするゴンシュルジュは俺の言葉に深く領いた。

このヘンテコなアパートの名前はガマカエルから付けられたものだつたのか。

それよりも気になる」とは他にあつた。

「どうしてガマカエルに孝明…立派な名前を」

「どうしてですかね。昔からそう呼ばれているんですよ」

「昔から?」

「ええ。何でも昔昔、その昔、孝明という位の高いお坊様か何かが

いらっしゃつて、この辺りで命の灯が消えたとかなんとか。その方の化身とも言われています」

「化身…ガマカエルがですか」

「ええ」

俺はヌメヌメとまさに言葉通りに全身がぬめつたあのガマカエルの姿を思い出していた。

大きな目玉をぎょろぎょろとさせ、一階から顔を出す俺をじつとみつめた後で「よつこいらせ」という感じで目の前の前の濁つた池に身体を沈めたガマカエル。

それが坊さんの化身だというのか。

「坊さんはそれでいいんでしょうか」

「何がですか？」

「いえ、何でもありません」

「しかし近藤さんに姿を見せるとはね」

そうだ、その言葉もひつかつっていた。

「ガマカエル…その孝明になにがあるんですか」

「孝明はね、滅多<sup>めうた</sup>に姿を現さないんですよ」

「え？」

「この町、明金三丁目の住人でも目にした人は一握りです

「そうなんですか」

「ええ。幻とも幻想とも言われています。何しろ見た人のほうが少ないんですから当然です。声だけは偶に「げー」こと聞こえてきますがね。孝明は氣に入つた人間の前にしか姿を現さないんです」

「そうなんですか」

「そうだといふことに私がしています」

「…そうですか。微妙な話なんですね」

「しかし、近藤さんは一回も孝明を見たと」

「はい」

「素晴らしいですね」

「そうですかね」

「歓迎されたってことですよ、近藤さん」

「…ガマカエルですか」

「孝明にです」

「…喜んでいいんでしょうか」

「勿論です。滅多にないことですからね。きっと良いことが起こります」

「そうなんですか」

「そういうことに私がしています」

「…そうですか。そうだと嬉しいです」

「きっとそうなります。私がそうでしたから」

俺の隣りで草むしりをするコンシェルジユの横顔にはなんとも言えない微笑が浮かんでいた。

それをしばらく見つめた後に深く緑色に濁った田の前の池を凝視した。

蓮の葉の下で時折魚のつぶしが陽光に反射する。

目を凝らし、池の隅々まで田を這わせてみたが、ガマカエルが姿を現す様子は無かつた。

コンシェルジユの傍には引き抜かれた草がどんどんと積み重なつていぐ。

することの無い俺もまた手を動かし、コンシェルジユと共に草むしりをすることにしたのだった。

池の周りをひたすら草むしりした。

すっかり綺麗になつた孝明の住む池の周りを見渡す。

草むしりなどしたのは何年…いや、何十年ぶりだろう。

そもそも土の道を見た最後がいつだったのかさえ思い出せない。

こうして土の上に立ち、雑草を取り除く。

何でもないその行為がすごく懐かしく感じられた。

田舎というものはやうだ。一度も訪れた場所ではないにしろ、こうした風景を見るとどこか懐かしさを感じてしまう。

草むしりをして綺麗になつた周辺を見た俺はすっかり気分が良かつた。

今ならガマカエルの孝明が現れても、そいつを両手に乗せ、そのねめつた身体を撫で回してやれそうな気分でもあつた。

さすがに誰かさんのようにそれを口の中にまで入れて可愛がることはできないが。

「近藤さん」

後ろからのコンシェルジューの声に振り向くと、いつの間に戻つていたのか、庭に面したコンシェルジュー部屋の窓を明け、そこに腰を下ろしながら俺に話しかけるコンシェルジューが汗拭いながら麦茶を啜つっていた。

「そんなんに夢中になつて草をむしりていたら熱射病になりますよ、少し休んでください」

コンシェルジューの隣りには、もう一つのグラスが用意されていた。それを指差しながらコンシェルジューが笑いかける。

言われてみれば頭のてっぺんが異様に熱かつた。

汗に濡れた首筋がヒリヒリと痛む。

「ありがとうございます」

言しながらコンシェルジューの隣に座つた俺は、用意された麦茶を一

気に飲み干した。

「近藤さんに手伝つて貰つたおかげですっかり綺麗になりました」

「いえ、たいした手伝いもしてません」

「いえいえ、私ひとりだったら、この状態にするのに、そうですね

…あと10分は掛かつてますよ」

「…たつた10分ですか」

「10分あつたらかなりむしれますよ、草。それだけの働きをして下さつたということです」

「はあ」

「もう一杯いかがですか」

「いただきます」

麦茶の入つたやかんからグラスに茶色の液体が注ぎ込まれると、揺れる液体の上をスズメの影が横切つていった。

ひたひたに注がれたそれを、今度は一口啜つて膝ひざの上に置いた。

俺は気に掛かつていたことをコンシェルジュに聞いてみた。

「内藤さん、わざわざから気になつていていたんですけど」

「何ですか」

「他の皆さん、今日はなにされてるんですかね」

「他の皆さんと言いますと?」

「アパートの住人の方々です」

「どうしてですか?」

「いや、朝からずっと荷物の運搬をしてたんですけど、その間、誰も見かけてないんですね」

「そうですか」

「まだ起きてないんですかね」

「どうでしょうね」

この話にあまり興味がないのか、それとも話したくないのか、コンシェルジュは麦茶を一口啜り、目の前の池のほうをじっと見てている。そんな様子を見ながら、コンシェルジュが先を続けてくれるのを待つてみたが、口を開く様子は無かつた。

訝りながら更に俺は尋ねた。

「まあ、今日は日曜ですけど、皆さん揃つてお休みつてこともない  
でしょう？ どうして誰も出てこないんですかね」  
池をじつと見ていたコンシェルジュが俺に向き直り、ぼそりと呟いた。

「今日はそんな日なんです」

「そんな日？ どんな日ですか」

「誰も部屋から出ないという日です」

「あの…意味が分からないんですけど」

「まあ、そのうち分かりますよ、近藤さん」

「そのうちって。少し説明しては貰えないですか」

自分でも眉間に皺がよっているのが分かつた。

コンシェルジュの言葉はいまひとつ意味が分からぬものが多すぎ  
る。

孝明の話にしてもそうだ。

「一体このアパートの周辺事情はどうなつてているのか。

「内藤さん、」

「近藤さん」

俺の言葉をさえぎるよつとしてコンシェルジュが口を挟む。

「今のはほんの冗談です」

「はい？」

「皆さん、出かけられてるんですよ」

「え？」

「今晚には戻つてくると思います」

「出かけてるって…みんなですか？」

「ええ

「一体どこに？」

「それは秘密です」

「え？」

「ま、そのうち分かりますから」

「……」

コンシェルジュはそれ以上言葉を続けようとはしなかった。

話しかけるなオーラが酷く立ち上つており、俺もそれ以上聞くことができなかつた。

首に巻いたタオルで額の汗、加えてタンクトップからムツチリと伸びた腕の汗を拭つたコンシェルジュは手にしていた麦茶を「ゴクリとふくよかな腹に收めると、「さて、草を片付けちゃいましょうか」と立ち上がり、ケツを揺らしながら池の方へと歩いていった。

俺はその後姿をしばらく眺めていた。

雑草をかき集めるコンシェルジュのタンクトップにハーフパンツといつたいでたちは、後ろから見るとさながら鏡餅だ。座り込む腹の肉とケツの肉が段々と積み重なり、丸餅を積み重ねたようである。

あの頭にヘルメットを被せたら、立派な巨大鏡餅だな……などとビックリいい想像をするより仕方無かつた。

## 規則とこの家の回覧板とは

搔き集めた雑草をアパートの裏に備えてある古い木箱の中にコンシエルジューと共に突っ込んだ。

こうして雑草を溜め込んでおくのは、それを腐葉土として庭に植える花などの肥料として利用するらしい。

「さてと」

草と土で汚れた軍手を外し、それを腹回りにぽんぽんと打ち付けるコンシェルジューの肉がブルンと揺れる。

雑草を詰め込んだ箱の上に軍手を乗せたコンシェルジューはゆっくりと振り向き、ふうっと一息つくと俺に笑いかけた。

「近藤さん、私の部屋で少し休みましょ」

そういうと黒い浴室の扉を開け、俺の返事を待たずに入つた。

とりあえず俺も後に続きコンシェルジュー部屋へ上がりこんだ。壁にそつて並ぶちょうどちんなどは昨日となんら変わりはない。しかしコンシェルジューの部屋の中は、甘い香りで充満していた。おもいつきり日本風の部屋に何故か洋菓子店を感じさせるふんわりと柔らかい砂糖の香り。

「何だかいい匂いがしますね」

流しで手を洗わせて貰つた俺の隣りでやかんにお湯を沸かし始めたコンシェルジューが嬉しそうに笑つ。

「そうでしょう。お菓子を作つたんですよ」

「お菓子ですか」

「ええ、昨晩近藤さんがお部屋に戻られてからまた」

「すごいですね」

「好きですかね」

コンシェルジューに促され、昨晩と同じ紺色の座布団に腰掛ける。窓から入り込む生ぬるい風が部屋の中の空気を揺らし、甘い匂いは

更に鼻先に絡みついた。

業務用並の冷蔵庫を開き、中から何かを取り出す「コンショルジュ。

「素晴らしい、素晴らしい」と呟きながら俺に差し出しあお菓子は、

何処かで見たような形のものだった。

「あ、これ見たことがあります」

「少し前に流行りましたからね」

「なんでしたっけ」

「クイニヤマンです」

「ニクマン」

「どうやつたらそう聞こえるんですか、クイニヤマン、です」

「クイ、ニヤマン」

「クイニーアマンとして日本で流行ったお菓子ですよ、クイニヤマン」

「ああ、クイニーアマン、そうそれです」

「ブルターニュ地方で最も古いとされるお菓子です、クイニヤマン。また、フランス語ではないんですけどね」

「へえ」

「ブルトン語でお菓子をさす「クイニー」とバターをさす「アマン」

が結びついた名前なんですよ」

「クイニーとアマンが結びついた名前ですか、へえ」

「そうです」

「だったら普通に「クイニーアマン」…でいいと思こますけどね」

「それを言つては実も蓋もないでしょ」

「はあ」

「このお菓子もね、失敗からできたものと言われてるんですよ」

「フランス、意外と失敗だらけですね」

「失敗だらけとこつのは聞き捨てなりませんね、失敗から学ぶと言つてください」

ぶつと少し吹き出してしまった俺を一瞥し、ピーピーと鳴くやかんの方へ身体を捻じ曲げたコンシヨルジュは立ち上がった。

「パン屋のおばさんがパン生地の上にうつかりバターを放置してしまってね、その生地は使い物にならなくなってしまったんですが、それを無駄にしたくなかったおばさんは、それを何度も何度も折り返してそこに砂糖をまぶして焼いたんです」

「へえ」

「もともとブルターニュ地方は塩作りが盛んでしてね、有塩バターを使う事が多いんです。塩と砂糖の絶妙なバランスで出来上がった奇跡のお菓子なんですよ」

「へえ」

「だから失敗から学ぶと言つてくださいね」

「…はい」

まだ少し不機嫌そうなコンシェルジュの差し出した日本茶を啜り、目の前のお菓子を一口かじる。

「おお！ まさに塩味と甘味の絶妙なコンビネーション！」

機嫌を直すため、俺は大袈裟に驚いてみせた。  
大袈裟に…とはいつたが、コンシェルジュの作ったお菓子は本気で旨かった。

「内藤さん、これ、すごい無いです、この…」  
「クマソウ？」

「近藤さん、わざとですか」

「…すみません、笑つてもらおつかと思いまして」

「氣を使つてもらわなくとも大丈夫ですよ」

コンシェルジュの顔にはいつもの微笑が戻っていた。

「いや、本氣で無いです、このクイーマン」

「近藤さん、わざとですか」

「へ？」

「クイーマン、です」

「ああ今は本氣でした。そうでした、クイーマン」

「美味しいですか」

「本氣で美味しいです」

「それは良かつた」

本気で感動する俺を見、内藤コンシユルジユの顔面もほころんだ。ほつとした俺は、二つ三つと続けざまにクイニヤマンを腹に收め、昨晚同様、まるでわんこそばのよつて屋になれば注がれる日本茶をぐびぐびと飲み干した。

庭に止めてある軽トラックの影は、右から左に少し長くなっていた。  
気がつけばもう夕方になろうかという時刻だった。

昨晚のコンシールジーハの言葉を思い出した俺は、5つ目のクイニーマンを半分までかじり、5杯目の日本茶を半分飲んでから話を切り出した。

あの、内藤さん

「作日」

見田の  
越馬のことで、見田と

卷之三

「規則」

「ええ。  
それ

俺の言葉に「そういえば」という顔つきになつた

一度深く頷いてから立ち上がり、隣りの二畳部屋へ移動して何かを持つて戻ってきた。

コンシェルジュの手には、よくテレビなどで見かける回覧板としてのあれ、何と説明すればいいのか分からぬが、板の上に銀色のクリップみたいなものがついた代物に、A4サイズの紙が挟まれている、いわゆる回覧板と言われるそれが握られていた。

回覧板というわりには何の変哲も無いただ真つ白な紙が挟まれているだけで、規則の規の字も書かれていない。

「二二八」

意味が分からぬ！」

「何も書かれてませんけど…」

「最初はこの状態なんですよ」

「最初?」

「(+)に色々書いてもらひわけですか」

「書いて、もらひ?」

「ええ。私がお題を出すんです」

「お題?」

「そうです」

ますます意味が分からぬ。

「お題つて、何ですか」

「私の気分によって色々です」

「気分…つていうか、お題の意味が分からないんですか」

「普通の回覧板じゃ、つまらないじゃないですか」

「え?」

「前にもお話したよつて、(+)の(+)ケーションの一つだと思つて、ただければ結構です。まう、この町は近藤さんも既にご存知のように何にも無いところでしょう。美しい自然と温かい人たちには恵まれていますがね」

「はあ」

「まさに吉幾三(+)って言いますかね」

「吉幾三?」

「テレビはあり、ラジオもあり、レーベルディスクも恐らくありますけども」

「信号ねえ、バスもねえ、おまわり毎日ぐるぐる」

「バスはありますけどね」

「そうですね、この町に来るときに乗つてきました」

「ええ。まあ、それはどうでもいいんですけどね」

「はあ」

「ここ(+)の管理は私が一人で行つていますが、何分私の身体も一つしかありませんから、手の回らないことも出でてくるわけです」

「はい」

「そのお手伝いをしてもらいたいこともあるんですね、ま、それだけのために回覧板をまわすわけではないんですね、主にそういうときには私の出すお題に答えていただいて、その評価が一番低い方にお手伝いしてもらおうと考えたんです」

「分かつたような、分からぬような」

「皆さん、その回覧板を見て楽しんでいただけますし、私もお手伝いをしてくれる方を選ぶことができるの一石二鳥というわけです」何だかよく分からぬが、偶にこのコンシェルジューがお題を出すといふ。

それを回覧板としてまわし、住人がそれに答える。

一番面白くない答えをしたもののが、何らかの手伝いをすることになる。と、まあこんな感じなのだろう。

「何だか大変そうですね」

「そうでもないですよ」

窓の外には薄つすらとオレンジに色づいた空が広がっている。途切れ途切れに並んで飛ぶカラスが、深緑に色を落とした山の向こうへ帰つていくところだった。

「近藤さん」

「はい」

「今夜はもうこれ以上何も食べないでいてください」

「はい？」

「後で内線を入れますので、そしたら下に降りてきてください」

「はあ」

「どうせだつたら斎藤さんと加藤さんも一緒に」

そう言つとコンシェルジューは湯飲みに残つた日本茶を飲み干して微笑んだ。

コンシェルジューの斎藤と加藤という言葉にすっかり一人の存在を忘れていた俺も日本茶を飲み干して「ではまた」と部屋を後にしたのだった。



## アカギヤザーできなくつすまん

自室、「レ・ミゼラブル室」の扉を開けると、斎藤部長と加藤の二人はまだ寝転んだままだった。

口を開け、高らかにいびきを繰り返す斎藤部長の足元には相変わらず加藤の頭がある。

驚いたのは、その足に加藤の鼻先がくつつこっていたことだった。

「お前、よく平気だな」

感心した俺はそつとその顔元に座り、斎藤部長の足を持ち上げ、さらに加藤の鼻先に押し付けてやった。

「ん…く、くせ…」

寝言なのか本気なのか、加藤は目を瞑つたまま訝しげな顔をしている。

可笑しなった俺は笑い転げた。

その声に斎藤部長が先に目を覚ました。

「なんだ、近藤、一人で笑つて」

「いや、なんでもありません」

斎藤部長の足を持ったままだったその手を離し、笑いをこらえて部長に向き直る。

「人の足で何をしていた」

「何もしてませんよ」

「してただろ?」

「起きてたんですか」

「いや、寝てた」

「そうですか、何もしてませんよ」

うんと伸びをした部長の口元によだれのあとがある。

まさかと思い、目を移した置の上に、よだれの海ができていた。

「部長」

「なんだ」

「そのよだれ、そこの畳、ちやんと拭いておいてくださいよ」

「よだれ？」

「ヤー、海ができますか？」

「ああ、ホントだ。シーだ」

「シー？」

「いわゆる、海だ」

「分かりにくいですよ、かなり。ちやんと拭いておいてくださいね」

「オーライ、つまり分かった」

「...はいはい」

部長と俺の会話に気づいた加藤が目を覚ました。

「あれ、何だか薄暗いっすね」

「もう夕方過ぎだからな」

「え、もうそんな時間っすか」

飛び起きた加藤が流しでふきんを絞る部長に声を掛けた。

「部長、もうこんな時間です」

「どんな時間だ」

「夕方過ぎです」

腕時計を部長に向け、加藤が立ち上がる。

「そろそろ出ないと明日の出社、間に合いませんよ」

「ああ、出社」

そうだ。明日は月曜だった。すっかり忘れていた。しかし先程のコンシェルジューの話を思い出した俺は六畳部屋に戻り、畳の上のよだれをこすり始めた部長の後頭部に話しかけた。

「部長、内藤コンシェルジューが後で内線をよこすって言つてたんですね」

「内線？」

「ええ」

「それがどうした」

「そしたら下に降りてきてくれってことなんですよ」

「ふーん。で、それがどうした」

「良かつたら部長と加藤もどうかって  
部長のこする畳の上にひざつきよりも横幅が広がったよだれが伸び  
てこる。

うんざりしながらそれを見ていると、加藤が呟いた。

「でも…帰らないとまずいですね」

何を考えているのだろうか、部長はひたすらよだれをこすっている。  
時折その手を休めても、また思い直したよつて畳によだれを広げて  
いる。

「まあ、帰らないといけないんなら仕方ありませんね」

「もういいですよ」と部長の手から布巾を取り上げた俺は、それを  
びつしそうかと一瞬悩んだが、とりあえず流しの隅に置いた。  
畳の上に四つんばいになつた部長はまだ何か考えている。  
しばらくせうした後、ふいにヘルメットを装着した部長はどこかへ  
電話を入れていた。

「あ、もしもし、社長ですか」

どうやら電話の向いの主は社長らしかつた。

「ええ、そうです、ヘルメットの効果は確かでした。しかしこまだ検  
証すべき点がいくつもありまして、もう一回ひりうで調べてみたい  
んですが…」

そんな会話を交わした後、電話を切つた部長は顔をあげて加藤に言  
つた。

「よし、これでコンシェルジ部屋にいけるぞ」

「え?」

「明日帰ればいいとした」

「そうつか

どうやら今日はこに滞在するつもりらしい。

「コンシェルジの説いなら仕方ないだろ?」

「部長、随分お気に入りですね、コンシェルジ」

「ルーをくれたからな」

「そんな理由ですか」

まあいい。一日ぐらり一人の一人を泊めてやつても害をこなす  
ことはないだろ？。

「でも何の用なんですかね」

加藤が俺に呟いた。

「さあ、なんだろうな」

何も食うなと言われたことを思い出した俺は、夕食の誘いだろ？と  
思っていた。

今夜も甘いものか。そう考えると、先程腹に収めたクイニーヤマンの  
欠片が逆流してきそうな気分にもなつた。

俺たち三人は畳の上に座り、映りの悪いテレビを見ながら時間を過  
ごした。

コンシェルジュの内線がくるまでの間、階下から、時々ガタゴトと  
何かの音がしていたが、テレビに映るルーのルー語が冴えまくつ  
いる間、部長の真似事のルー語と笑い声に打ち消され、何の音な  
かはよく分からなかつた。

時計の針が七時を過ぎた頃、突然部屋に声が鳴り響いた。

もちろん、「コンシェルジュです、コンシェルジュです……」と繰り  
返すあの内線電話の呼び出し音…呼び出し肉声だ。

初めてそれを耳にする齊藤部長と加藤はかなり驚いた様子で腰を半  
分浮かせて固まっていた。

「トウギャザーしようぜっ！」とデカイ口を見開き、俺たちに笑い  
かけるルーの顔が映る画面にリモコンを向けてルーの言葉をさえぎ  
つた俺は、「トウギャザーできなくてすまんな」と言つた齊藤部長の  
声を背中に聞きながら、内線電話を取つたのだった。

## 住人達との遭遇

しかし本当にこの内線電話の呼び出し音は何なんだ…と呆れながら持ち上げた受話器から、コンシールジューの声が漏れていた。俺が「もしもし」と声を発する前から何やら一人でしゃべっていたらしい。

妙に興奮気味のコンシールジューに困惑しながら「近藤です」と返事をした。

「あ、近藤さん」

「はい」

「準備ができましたので、下に降りてきてください」

「準備?」

「ええ。軽トラックがまだあるみたいなので、近藤さんと加藤さんもいらっしゃいますよね」

「はい、どうやら今夜はここに泊ることにしたみたいで」

「それは良かつた。じゃ、お待ちしてますよ」

テンションの上がっているコンシールジューは俺が「はい」と返事をする前にガツチャリと受話を置いた。

興味津々に俺を見守る部長と加藤に振り向いた。

「準備ができましたって」

「準備?」

部長が口の脇についたよだれの粒をこすりながら呟く。

「ええ、準備ができたって」

「何の準備つすかね」

子供のように瞳を輝かせる加藤は既に腰をあげ、玄関先へ向かおつとしていた。

「なんだろうな、この時間だから夕食か何かだとまは思つが…」

俺は昨日の晩を思い出していた。

夕食は殆どをフランス菓子で済ませるとこいつコンシールジューの言葉

だ。

加えて田中に餘ったクィーやマンの後味が口の中で暴れ始めた。

夕食ところのひよつとあるとひよつとある。

「加藤」

「はい?」

「お前甘いものは好きだったよな」

「ええ、好きですよ。つていうか大好きです」

「そうか、ならしい」

「なんすっか?」

「いや、なんでもない」

「俺も好きだぞ、甘いもの」

部長が話しに割り込んでくる。

「そうですか」

「スイーツ、つまり甘いもの」

「…ですか。夕食をお菓子で済ませたことはありますか」

「それはない」

「コンシェルジュ部屋でだされた夕食がお菓子でも文句は言わない

でくださいね」

「どうこうことじだ

「そういうことです」

とりあえず俺は一人を引き連れて階段を下った。

コンシェルジュ部屋の前に立つと、中から何とも言えない香りが漂つていた。

勿論、甘い香りだ。

「やつぱり

「なんだ?」

「いえ、なんでも」

訝る部長の声を交わし、呼び鈴に指を添えた。

しかしそこで甘い香りの隙間を縫つて別の匂いも漂ってきた。

「肉っぽいっすね」

加藤が俺の代わりに声をあげた。

「オタフクソースの匂いもするぞ」

くんくんとアホな犬のよつに左右に首を振りながら匂いを嗅ぐ部長も呟いた。

確かに甘い匂いのほかに、腹の虫をぎゅうぎゅうと鳴らす夕食っぽい匂いが漏れてきていた。

俺は少々安心した。部長の作った激辛カレーとお菓子以外を昨日から食つていなかつた胃は、素直に肉とオタフクソースの匂いに感謝していた。

呼び鈴に添えた指を押し込むと、『ボンジユール、ボンジユール』と中に響く肉声呼び出し音が外にも漏れた。

「ぶつ」と笑う加藤の頭をこつき、コンシェルジューが現れるのをしばし待つた。

力チャリとショーンの外れる音がすると、ドアは勢いよく開かれた。調度、ドアの影にいた斎藤部長にこれまた勢いよくぶつかつた黒いドアは、弾みでもう一度バタリと閉まってしまった。

「いでつ！」

脂で照かる鼻を押さえた部長が足踏みをしていく。

それを見てゲラゲラ笑う加藤の姿に俺までも吹き出してしまった。

部長の鼻の脂がついたドアがもう一度ゆっくりと開くと、中からコンシェルジューではない顔がよつきりと伸びてきた。

「ボンジユール！」

その見知らぬ顔が「ボンジユール」と言つ。

つられた俺たちは躊躇なまゝ二人揃つて「ボンジユール」と挨拶を返した。

直後自身の言葉にウケタのか、加藤がまたも爆笑し始めた。見知らぬ顔の主は男だった。

タンクトップにハーフパンツといいでたちは、内藤コンシェルジューと同じものだったが、がつちりとした体つきに浅黒く焼けた肌を

てかでかと健康的に光らせ、一カリと笑ひ口の中の歯もキラキラと白く輝いていた。

ムキムキとタンクトップから伸びる腕を振り回し、再び「ボンジュー！」と叫ぶ声の主は、「ささー、どうぞどうぞー」と俺たちに手招きをした。

「あの…内藤、コンシェルジューさんは

「中にはいますよ…」

「入つていいんでしょうか、お邪魔ではないんでしょうか」

「呼んだんですから、邪魔なはずないじゃないですか！ お待たせしてしまってすみませんね…」

「はい。じゃ、お邪魔します」

「どうぞ！ どうぞ！」

いちいち感嘆符が付いてしまつてカイ声を発する体育会系の男が中に消える。

部長と加藤、そして俺は顔を見合させた後、靴を脱ぎ、恐る恐るコンシェルジュー部屋に上がりこんだ。

流しから六畳部屋に続く引き戸の影からそつと中を覗くと、コンシェルジューを含めて5人の顔が丸いちゃぶ台を囲んで俺たち3人を眺めていた。

一瞬の間があつてから、皆思ひ出したよつて声を上げた。

「ボンジュー！」

「一体なんなんだ。

砂糖、肉、オタフクソース、更には豆板醤、何となく醤油、もはや無国籍空間へ足を踏み入れてしまつたような香りに包まれながら、俺たち三人はしばしほけつとその場に立ち尽くしていた。



「さわつ！ つっ立つてないで腰を下ろしてください！」

タンクトップにハーフパンツのさつきの体育会系の男がやっぱり感嘆符をつけたセリフで俺たちに座るよう促した。

「どうぞどうぞ」

コンシェルジュが紺色の座布団を三つ突き出した。

「失礼します」

俺たち三人は熱氣で白く曇る部屋のちやぶ台前に腰を下ろした。

それでなくとも狭い部屋だ。

俺たち三人は熱氣で白く曇る部屋のちやぶ台前に腰を下ろした。

それでなくとも狭い部屋だ。

明らかに六畳部屋にちやぶ台を囲んでかしこまる人数では無かつた。

両脇の斎藤部長と加藤も窮屈そうに身体を縮こめていた。

「座つていただいて何ですが、これから庭に移動します」

コンシェルジュの一言で皆が一斉に立ち上がった。

「え？」

俺たち三人は正座したまま、立ち上がった皆さんに取り囲まれる形となつた。

「さ、立つて立つて！」

何なんだ一体。

座れと言つといて、今度は立てと言つ。

意味も無くあせりながら立ち上がつた俺たちは、ぞろぞろとベランダから外に出る人間たちを突つ立つたまま眺めていた。

体育会系の男がバーベキューのコノロを持ち出し、手際よく点火作業を開始した。

内藤コンシェルジュは巨体を揺らしながら忙しなく肉やら野菜やらを外に持ち出している。

ジユースやらビールやらの入つた箱を軽々と持ち上げた中年のおば

さんが、ショッキングピンクのつっかけに、これまたショッキングピンクのペティキュアが施された足を突っ込んで庭を歩き回っていた。

部屋に入つて真っ先に田に飛び込んできたショッキングピンクのシャツにショッキングピンクのスパッツ姿でだ。

「……パー子」

隣りの加藤がもつともらじい台詞を亥いていた。

「……レミ」

逆隣りで亥いた声に驚いた。部長だつた。

「どうしたんですか、部長」

「……レミだ」

「は？」

「あのピンク

「はい？」

「レミだ、あれは絶対」

何を言い出すのかと思つたら……架空の人物レミのことを言つてゐるのだろうか。

「レミって……レミイズワンドフル？」

「そうだ」

「知り合いでですか？」

「いや」

違うのかい！ 加藤も興味津々で部長の顔を凝視してゐる。

「先輩、あの人ガレミさんですか？」

「いや、知らないし」

「でも今部長がレミって」

「妄想だろ？」

「でも何だか……パー子ですけど、レミって感じつすね

確かに。

全身ショッキングピンクのおばさんは、いでたちはパー子だが、何となくレミイズワンドフルオーラを全身から立ち上らせていくよう

に見えた。

ショッキングピンクってところが、いかにもワンダフルだ。

「ま、とにかく俺たちも手伝おつ

つ立つても仕方ない。

外に食料を運び出しているところは、これから外で夕食会のようなものが開かれるのだろう。

そしておそらくこれは俺の歓迎会だ。

「ちょっとすみません」

後ろからの、か細い声に振り向いたがそこには誰も居なかつた。いや、居たのだが見えなかつただけだつた。

少し視線を下に移動すると、マッシュルームカットのチビすけが小皿を抱えて俺を見上げていた。

「そこ、どいてくれませんか」

マッシュルームカットのチビすけが生意気な口調で小皿を抱えた腕を左右に振り、「だけ」と促してくる。

「あ、ごめん」

加藤が俺の腕を引っ張つて道を開けた。

「君はレミの子か」

ベルンダから外に出かけたチビに部長がまたも話しかけた。

「ちょっと部長、敷からステイックに…」

この状況に少々混乱していた俺は、当たり前のようルー語を使つてしまつた。

それを恥じるまもなく、チビがくるりと振り向き部長を見上げて面倒臭そうに咳いたのだ。

「そうですけど、何か」

「ええつ」

俺と加藤は仰け反つた。

そうなのか？ お前、レミの子なのか？

といことは、あのショッキングピンクは…

「あのピンク…レミイズワンドフルなのか？」

恐る恐るチビに聞いてみる。

「違います」

「え? でも今レミの子だつて」

「レミの子です」

「あのピンクはレミ……じゃないのか?」

「レミです」

「つづん?」

なんだ? よく分からない。

「よく分からるのは、僕のほうです」

「こちらの気持ちを理解したのか否か、チビはあからさまに嫌な顔つきをして俺たちをねめつけた。

「あれは確かに僕の母です。そしてレミです。しかしレミマイズワンダフルではありますん」

「…」

「なんですかワンダフルつて。いい年して意味の分からないことを口走らないでください」

「…」

確かにレミだつた。そしてこの小生意氣なチビはレミの子だつた。

嬉しそうに頬を蒸氣させながら部長が玄関を出ていった。

部長の変な勘……とこかただの勘違いから始まつたレミの存在と消息。

そのどちらもが今この場で証明された。

ここに来てから可笑しなことばかりだ。

俺と加藤は部長のあとを追うようにして玄関から庭に回つた。

昨日の半月はやや肉を増し、満月まであとひと肥えという状態で濃紺の空に浮かんでいる。

部屋の中では氣づかなかつたが、田の前の田んぼでは蛙の大合唱が鳴り響いていた。

澄んだ夜気が首筋に心地よい。

田舎の夏の夜は、夏と感じさせないほど透明な空気に満ちていた。

「ちよっとこの軽トラ、端に避けてもらえないかしら」

「…」

「ああ、すみません」

素直に返事をした加藤が急いで軽トラを移動した。

空いた場所にビールケースを並べて、レミが手際よく即席テーブルを作り始める。

その傍で若い男が焼き鳥を食っていた。

つかつかとその男に歩み寄ったレミがガツンと拳を食らわしている。

「マー坊、あんたもちゃんと手伝いな！」

マー坊と呼ばれ、頭をぶん殴られたソイツは、「いてえなあ」とボヤキながらレミの作業の手伝いを始めた。

コンシェルジュは、オタフクソースの香り高いやきそばをレタスのダンボール箱の上に置き、めいめいの皿に取り分けていた。その傍に、猫を抱えた若い女がやってきた。

「内藤さん、私も手伝います」

「ああ紗希ちゃん、宜しくお願ひしますね」

紗希ちゃん…？ どこかで聞いたような…

紗希ちゃんと呼ばれた女は抱えていた猫を足元に下ろし、内藤コンシェルジュの手伝いを始めた。

「可愛い子ですね」

加藤がにんまりと微笑み、俺に語りかけると、足元にぴたりと寄り添つたままの白い、しつぽの先が黒い猫が「ふーっ！」と俺たちを威嚇した。

自分の女に声を掛けられたような、人間のよつな目つきだった。

体育会系の男の焼く棒付き肉と野菜から程よい煙が上がっていた。

俺と加藤の腹の虫が同時にぎゅるりと鳴ると、それに応えるように内藤コンシェルジュの召集がかかつた。

「さあ、皆さん集まつてください。そろそろ始めましょう…」

腹の肉をフルンと搖すつたコンシェルジュが軽く手を叩くと、蛙の

合唱が一瞬止んだ。

「ぐえ～こ」

恐らく孝明だろう。野太い腹の底からの声が一発庭に響き渡る。

それを合図に蛙の大合唱が再び始まった。

げこげこげこげこ、ぐわぐわぐわぐわ……

自然のBGMに包まれながら、メゾン・デ・孝明の最初の宴が始ま

つたのだった。

## やぱり歓迎会

コンシェルジュの召集に、きちんと手入れされた庭で各自（おののおの）の役割をそれとなくこなしていた面々がバーべキュー・コンロを取り囲む形で集まつた。

「もうお気づきかと思つますが

コンシェルジュは皆をぐるりと見渡したあと、最後に俺に視線を合わせ、一つ頷いた。

「これから近藤さんの歓迎会を始めたいと思つます」

「よー」と体育会系の男の声が澄んだ夏の空気に響き渡る。プラスチックの容器にビールを注いでいたレミが、手際よくそれを配り歩いている。

俺の歓迎会にも拘わらず、最後に回つてきたビールを受け取り、コンシェルジュに視線を移した。

それを確認すると、コンシェルジュは再び深く頷いて軽くビール容器を持ち上げた。

「それでは近藤さん、一言お願ひします」

これと言つた挨拶を用意していなかつた俺は、「お世話になります」やら「ご挨拶が遅れまして」やら「何卒宜しくお願ひします」程度の当たり障りの無い挨拶をした。

「これからトウギヤザーしてやつてください」

隣りの部長が俺の言葉を締めくくるように言つた。

「ふ」と笑う加藤以外、笑いを上げるものは居なかつた。一瞬の間をおいて、マー坊が声を上げた。

「四露死苦ー！」

生の声をしても、明らかに漢字のそれに聞こえる暴走族上がりの「よろしく」は、部長の壊した変な空気を余計に搔き乱した。

「ま、乾杯しましょ、乾杯」

とこうレミの言葉に、生ぬるくなりかけたビールを持ち上げ微妙な

乾杯を交わした俺たち三人とメゾン・デ・孝明の住人達との宴は始まつた。

序盤、集まつた連中はひたすら物を食つていた。

歓迎会といつ名に相応しい盛り上がりも何もあつたものでは無かつた。

ジュー・ジューと焼ける肉の音だけがしつかりと鳴り響いていた。

俺に声をかけてくる奴さえいなかつた。

どこぞの運動会に紛れ込んでしまつた一般ピープルのような心持だつた。

歓迎会といつよりも食事会、もはや待ち望んでいた配給にありつく様な連中の背中を一步下がつて見守つた。

配給といつ呼び方が古いのならば、さながら大食い大会の一場面を見ているようだつた。

ヤキソバやら肉やらビールやらが、それぞれの胃に詰め込まれていく。

相当腹が減つているのか、それともただ飢えているだけなのか。

部長と加藤もまた、コンロの最前列に陣を取り、肉にかぶりついていた。

ふと隣りを見ると、マッシュルームカットの小生意気な小僧が立つてゐる。

「何ていやしい」

頭のてつぺんに天使の輪ができるつやつやの髪を僅かに揺らし、いつちょまえなセリフを吐く小僧。

「呆れてモノも言えませんね。あんなにガツガツと。大人げ無い。

そういうえばさつきあなたの後に「トウギヤザーしてやつてください」とか言つていた人、あれ、あなたの上司ですか。それにも呆れますね。一体何歳なんですか。まったく最近の大人には呆れるばかりですよ」

モノも言えない程呆れているはずの小僧は、こちらが呆れる程、モノを語つてゐる。

「君は食べないのか」

「あそこに混じって食べる気がしないだけです」

頭に乗せた天使の輪がこれほど似合わない子供もいなだろう。

「レ!!!…君のお母さんもあそこにいるじゃないか」

「まあ、そうですけど」

痛いところを突かれた小僧は、手にしていたオレンジジュースをグ

イグイと飲み干した。

額を上げ、後ろに下がつた髪の輪は、雲の形に歪んでいた。

コンロから上がる湯気と肉から湧き上がる脂の匂い。

先ほどまで澄んでいた空気は、熱氣に少し、湿っていた。

## やまとぱり歓迎会（後書き）

この作品の更新の見通しがたっておりません。  
これから先の話を続けられる自信がなく、近々閉じようと思つて  
います。  
読んでくださっていた方には大変申し訳ないのですがご了承下さい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6815c/>

---

メロン三丁目、めぞんディコメ

2010年10月9日02時35分発行